幻の繪馬

泉鏡花

一

薄紫の櫻街樹にかゝつた、颯と明い一時雨ではあるけれども、雨具なしに、美しい那の姿で、と電車の裡では、お互様御多分に漏れぬ男ばかりか、容色と服装の事に掛けては、敵同士も尋常ならない女でさへ、中腰に窓に縋つて、故と見送つたのがある。

電車が麻布の高臺の、唯ある停留所で留つた時、麻袴を亂して掛けた、其の雨の中へ、猶豫はず蓮葉に下りた婦は、中脊で華奢だから、少く二十一二に見えるが、目もとの色氣は四五と云ふ處であらう。

お納戸に紺と藍、細く紅絲の交つた、やたら縞とか云ふ一枚小袖。友染の長襦袢は、水色地に淺葱と、薄萌黄と、燃えるやうな緋で、海松輪の絞りばなしが、〓と目立つて、ちら／＼不知火。

容色もまた凄いほどで、半襟は紫紺に縫の銀絲の波、眞紅の枝珊瑚を處々に浮かして沈めた。帶は見えず、黒縮緬の紋着の羽織の袖を、撫肩をしめて胸に合せた、其の服裝で、前後も見ず、すつと出た、雨の中。

踏段にひらりと、蹴出褄の海松輪も、大路にちらめいた半襟の其の枝珊瑚樹も、黒雲は低し、消えつゝ、點る火の紅の風情なれば、淡く亂るゝ雨の脚も、美しい女の肩に、絲の太白の蓑を捌く。

蓑は斜に、時雨は縦に、すら／＼と道を横切る端に、並樹を潛つて、と視ると、櫻の葉が雫の音と共に、はら／＼と下行く紅の影に誘はれて、染まつて、▬▬と艶やかな緋を點じた。

「おゝ、冷い。」

濡るゝ身は扨て厭はぬ。が、雪の降る日は寒くこそ、と悟つたやうに、迷つたやうに、そして、ぢれつたい、と云ふ態度で、輕くトンと白く妙な細い頸

をたゝきながら、五間々口で土地に聞えた、大な花屋の店に入つた、　　……　入り科である。　……

「おゝ、冷い。」

軒を走る點滴より、其處に店頭に堆く束にした、白と黄菊の小さな輪と、絞を交ぜた山茶花の露に、ひやり、としたと云ふ趣。　ーー　そんなら避けても通りさうなを、故と花ずれ、葉ずれ、姿さへ靡かして、すれ縺れに濡れた頸は、宛然秋の蝶の翼の、觸れば消えさうな白さである。

花政と白抜に、淺葱の桔梗の印半纏を着た、若衆が三人、　ーー　中の一人は花屋の悴で、　ーー同じ半纏、折目はついたが、年紀だけに襟の皺びて見える、　……　去年、喜の字の祝に、菊で、菊慈童の活人形を店に飾つて、通、裏町を掛けて冷振舞、樽酒で賑はした隠居の禪門、腰は弓より撓つた、が、氣は紙鳶の風箏ぐらゐに、ぶんと張つたのが、巴に働く若衆の眞中に、みだれ咲のダリヤの渦巻で、

黄薔薇紅薔薇白薔薇ヒヤシンス、チユリツプ、濃い緑のアスパラガス、箱根草など取々に、芬と醉ひさうな色の霧の、薫を籠めて、大口の註文の花束を造る折から。

世間は土砂降に成らうとの、此の紫の雲を見よ、と商賣柄、浮世離れのした見識で、諸聲に、入らつしやい！　など浴びせるのでない。

隱居爺が、捻つた刈萱の葉ぐらゐに乾びた聲で、

「へい、おいでなさい。」

唯、美人が、花束の中に、明い顔して、一寸仰向き加減に、

「今日は？」

「へい、おいでなさい。おい、何か、小ものゝ、何か、」

と云ひながら、薔薇の大輪を嘗めるやうに、コトン／＼と頭で調子を取つて、葉の中から、横目でじろ／＼、と顔を覗く。　・・・・・　屈腰の爺様、氣の知れない麻布に住んで、七不思議前から草分の甲羅、

亀の卜を行つても、此の花主ばかりは、何とも解せない。お姫様のやうな、それしやのやうな、おつとりしたやうな、蓮葉なやうな、觸つても消えさうで、殺しても死にさうもない、意氣づくりの媚かしい、色つぽくて、すつきりした、高島田が圓髷になり、銀杏返しが女優髪で、今日は櫛卷で居るのを、件の葉がくれ、蟋蟀の如き黒い目で　ー　窺ひ／＼、

「それ、何か、御新姐さんが　……　えゝ、お嬢様が、何が、おいでなすつた。　……　お目に掛けねえ、何か、何か。」

若衆が兩方へ左右へ別れる、花棚、花瓶、花手桶。

「可いわ。」

と莞爾して、美人が留めて、

「私が勝手に見る方が早手廻しだわ。お爺さん、ねえ。」

「へい。」

「冷いわねえ。」　と此の時、おくれ毛を白魚の

指、しつとりとした櫛巻の、緑がしたゝるばかりである。

爺様は、しやつきりと這身の膝に、握拳の両腕を突張らかして、下から天井へ頤で見當をつけて、女の顔ぐるみ見上げると、其處で、ぺろんと・唇を舌で嘗めた。

「天井が漏りやすかね。」

女が若鮎の水を切る手首をすツと、禿頭を斜に切つて打つ眞似して、

「可厭な、お爺さん、皮肉だよ　……　町の時雨に女が一人傘なしに花屋へ驅込んだんだもの、冷い、と言へば濡れた事は分つてるわ。傘を借りたいぐらゐ、大抵知れさうなもんだわね。」

「へツへい。」　と、ぐなりと首を垂れる、と床を擦々ほどに揉手をしながら、

「へツ、へい。」

「あら　……」

婦人も、さすがに目が早かつた。正面の障子張の格子の蔭で、蛇目傘の柄を此方に向けて、丁度其處へ立つたのは、色白な結綿島田、緋鹿子の手絡、同じ襟、友染の前垂した、お絲と云ふ評判娘

「まあ、」

「へッへい。」

爺様は一輪、黄薔薇の香を、フンと嗅いだ。

「花屋政右衛門、誰だと思召す　……　電車を降りなすつた時から、ちやんと心得たもんでがすて。へッ、へい。」

「可厭だ。梟が吃逆をするやうね。」

若衆が、あはゝはゝ。　……　むつゝりだんまりとした悴も笑へば、娘もうつむいて顔に袖。

爺様、目を丸くして、

「これは、如何な事。」

「でも、恐入つたわ、私。」

「何うでがすえ、花屋政右衛門、池の坊入道月三齋は、へッへい。」

おツと出直(でなほ)して今度(こんど)は咳一咳(せきばらひ)。
「えへむ、江戸児(えどっこ)だてね。」

二

處へ、横合から珠玉の燦爛たる指環の手を出した、四十六七で、若づくりの貴婦人が一人ある。

「私が借りる。此の下女にも一本な。」

と頤で掬つた。痩せた、頬骨の張つた顔を、眞白に塗つて、お定りの廂髪に黄金縁の眼鏡を晃乎つかせた、生際が、辷けたやうにべろんとして、額のてら／＼と光るのが、鳳眉と云ふのに、ベツタリと眉墨を引いて居る。

紫紺の縮緬、銀泥の雲に、鸞鳥の縫あるコオト、やたらに地のいゝのを、がさりと着下し、何う云ふ好みやら、萌黄鞣皮の爪皮の掛つた低歯の吾妻下駄と云ふ體俗。肉色の凉傘を疊んだのを、一人連れた、肥つた赤ら顔だが、同じく塗つた廂髪の小間使らしい、其の銘仙の羽織の袖に、恭しく抱かせたのを從へて、　ーー　これは電車から下りたのではなかつた　ーー　今の美人より一足さきに、反身で花屋の店に入つて、唯、先づ黙然で棚を見廻して居た處で。

「私な、直き此の横町の角邸です　……　知つてぢやらうね、槇ケ原です。」

名を聞いては知らないで成らうか。儉約と内福と……　鍼や按摩の笛ではないが　……　音に響いた子爵家の　……　扨は令夫人であらせられる。

「借ります。」　と澄まして傘を御自分が受取つた。

また、其の權式と威光とでは、素町人の結綿の娘なんぞ、言が返さるゝ次第のものではない。

「もう、一本、　……　下女にな。」

一寸猶豫つた振の娘に被せて、言つて、

「あゝ、すぐ家來どもに持たせて返します。　……　今日は些とな、慈善事業の事に就いて、赤十字へ出向いたでしてな、故と乘物を用ゐんで、俄雨で難儀でな。　……　何は當家は直接に邸へは出

入をさせては居らんが、御前様がよく御存じで、御吹聽を遊ばすによつて、上ツ方をはじめ、方々から立派な註文が來るさうに聞きます。よい店ぢやの。あゝ、知つて居ような、槇ケ原ぢや。」

娘が、最う一本蛇の目傘を持つて出て、此は小間使が受取るまで、子爵夫人が恁う立續けに御意あつたのは、然し娘に向つてゞはない　ーー　爺様を見よ　ーー　花政入道月三齋は、先刻から仕事の手を休めて、地床を這つた、のめり腰の大な兩提を、ぶら／＼と尻尾の如く片手で捻つて、百日紅の根の自然木の腰掛に、飲み冷しの澁茶と一所に轉がした燐寸で、銀の村田張へ吸つけて、すぱ／＼と吸ひながら、ものをも言はず、一倍、長い顔を圓く縮めて、額で見上げて居るのであるから、夫人の方でも一通り演じないと、何うやら間拍子が惡かつたからである。

「それではな。」

と威儀を正しく、肩で向直つて出ようとすると、娘が會釋したばかり。唖かと思ふ爺さまの默りさ加

減。で、お剰に頭で潜つて這身に凭込んで、あの、額で見上げる工合が、何となく不氣味なほど仔細ありげで、ものが唯では濟みさうも無いので、子爵夫人は不圖氣がさしたらしく、　・・・其處に、とんと黒縮の羽織の袖をだらけた風な投遣りに後へ刎ねて、懷手で、　・・・・・　雲に三日月を引攫はれた柳のやうに、薄ら冷し、詰らなさうな、この美しい女にも、じろりと目を遣つて、一所に爺様から瞳をはづして、素燒の大瓶にふさ／＼と突込んだ梅もどきの實の撓なのと隣合つた、花桶に、冷く輝く薄色の牡丹に對した。

「室咲ですの。」

「冬牡丹でございます。」　と、悴が花の中で珍らしく口を利いた。

つい、と抜取る　・・・・・　葉裏に黄金の太い指環は、妙に毒ある昆蟲の光を放つて、

「幾千ですか、一本。」

「一圓。」　と一ツ頭を突出して、と龜の悶ゆる如く、腰を振つて、爺様がひよこ／＼と出て言つた。

「一圓？」　と、コオトの胸を後へ反らして、夫人は怯乎としたらしい。

其の訛つたのに押被せて、爺様、もう一つ頭を動かし、

「へい、七圓でございますよ。」

「むゝ。」

「七圓でございます、はい。」

「高價いなう。」　と兩手で枝をくるりと廻す。

「へい、甲州諏訪の湖畔の出來でございましてな。へい、其の諏訪法性と云、ふ銘のございます、そりや霜月の一輪咲。もし、奥方様。みの作と申す花つくりが、入念に丹精を仕りました。其の半開が、奥方様、御床の間で一杯に開きますと、蕊が赫と恁う。」

で、大な皺手の兩方の指を、じやわ／＼。

「其の、狐火同然に燃えますと云ふ、無類の逸品にございますので、へい。商賣人にも一寸は手に入

りませんくらゐなもので、金七兩は花政大勉強でございまずよ。」

子爵夫人は手にした牡丹を花桶に挿棄てた。其の時威儀を整へながら、

「後ほど　……　更めて家來どもに取りに寄越す。」　と頤で小間使を從へて、蛇の目二本でづツと出る。

「や、奥方様。」

「むゝ。」

「お使を下さいます以前に、他々のお客がございますれば、其の方へ譲りますが、お差支へはございますまいで、へい、此の儀を一寸承はり置きますので、へい。」

「可いともな、だが、買手は、まあ、有るまいよ、ふゝ。」

と片頬笑をして小間使の顔を見た。

途端であつた。

「お爺さん、私に頂戴。」　と、いきなり美しい女が手を掛けた。花政より前に、〓と牡丹が薫つて、花片が頷いた。

さすがに顔を赧うした、子爵夫人は、濃い眉を動かして、じろりと睨んだが、

「これ、涼傘に泥がつく。」

と小間使を睨直して、ものをも言はず、ツンとして出合頭。

「豆腐うい。」　と、櫻街樹で濡れた荷が出抜けに擦違ふ。

「あら。」

と奥方の涼傘を庇つて、小間使が、ひよいと退く。

「豆腐うい。」

三

「其のかはり此方は月賦よ、七圓だなんて私、差當り……煙草もない。」

と袂を反す袖裏の紅羽二重、霞んだやうな瞼で、袂を覗込んだ様子は、娘らしく仇氣なかつたが、卷莨の上包みを引捻つて、ポンと投つたはあられもなや。

「喜代公、お前持つてるだらう。差上げねえ。」

爺さまに然う言はれて、若衆の一人が、どんぶりから卷莨を出して、

「お粗末です。」

「一寸、隅ツ子に口を一ケ所、振出しの金米糖だね。ねえ、喜代公。」　と花の中の、件の百日紅の腰掛に、悠然と裾を落す。

「矢張り月賦で買ひますさうでね。」　ともう一人の若衆が言ふ。

「おまけに、名前までお覺えなすつた。」　で、

喜代公は苦笑。

「覺えないでさ。月賦の方は忘れても　……

ねえお爺さん。眞個に借りるのよ。」　と落着いて、

灰を拂いて、串戯では無いのである。

「えゝ／／　……　牡丹一輪、金七兩。黄金縁の大年増が買ひ人はあるまい、ときました處を、ずばりと買つておくんなすつたい、ものは氣合だ。何ね、たゞでも可うがすが、それぢやお前さんが御承知はなさるめえ。　……　實はね、一枝二分で可いんで、科と言分が癪だから、倍と吹掛けた處を、お前さん、一圓と訛つたから、七圓と押被せた。こゝ等が町内での軍師さね。」

「お父さん、餘りだわ、私ひや／／した。」　と格子の裡から、娘の緋鹿子が白い顔。

「祭禮の腹癒せよ。ねえ、お前さん。」

と今度は爺さん、美しいのゝ卷莨から、ぱくりと雁首へ吸着けて、

「去年は影祭で沙汰なしさねえ、此の夏だ、お前さん。町内揃ひの提灯で、若え衆が、あの邸へ渡りをつけると、幾千がもんだね、二分にや足りねえ入費だ奴を、お上へ申上げた上沙汰をいたす、さ、ね、何うでがすえ。三太夫も三太夫だが、お上が、とかみのえみためでね、お聞濟に相成らんでがさ。花政入道ぢやねえけれど、町内これで齒が抜けた。提打二つ、暗夜でがせう。景氣ア惡いやね、え、お前さん、御神輿は納つても、入道が納らねえ、其の實、兩足納つちや居ますがね。

まだ其ばかりぢやアありませんや。手前どもへも、出入りのね、植木屋が彼の邸へ雇はれたが、ね、お八ツの茶を出さねえ。言種をお聞きなせえ。英吉利ぢや午後二時頃、菓子も珈琲も飲食をしねえとね、何うでがすえ。其のかはり倫敦ぢや牡丹一輪七百弗だ、金七兩直でがせう。はゝはゝゝ、」

「まあ、」　と肩の辷る羽織の襟を、たをやかに、紐を引いて引寄せながら、うつかり嬉しさうに聞惚れて居た美しい女が、ハツと其の手を胸へ當てた。

「あら、誰、私の名を呼んだ。」

唯、爺さんも、きよとりと目を放して、ひく／／と眉毛を額で　……　若衆二人も、ひよい、と恁う其處等を見廻す。　ーー　成程、變な聲が、おわか、わか、と言ふやうに響いたのである。

「誰？　……　一寸、喜代公だね。」

「壮ン、壮ン。」

喜代公は、頸を窘めて、一つお辭儀で、

「いよ／／お覺え下すつたのは難有い仕合せでございますが、私あまだ、根ツから、へい、貴女の御名前を存じませんので。」

「ぢや何ですかい、唯今の。」

二人が揃つて顔を見た。　ーー　一人は枝の鋏刀を控へ、一人は根揃への手を留めて。

「えゝ、わかよ。月賦だから覺えて下さい。姓は錦木、名は和歌子、　……　鶴女とは申さない。

和歌の方、和歌の前、和歌子、馬鹿子、　　……
一寸、むき身を賣るやうだわねえ、」　と獨りでくす／／襟に腮を差入れて、唯うつむくと不思議なほど品が可い　……　が又媚かしい　……　緋の肌襦袢が、ちらりと雪の頸を覗いて、紅筆でかいたや艶書の趣。

爺さまが頭を掉つて、
「串戲ぢやねえ、何だい、今のは。」
「あら、與四郎よ、お父さん、」　と、娘が言つた。

「何、與四郎か？」
「花藏の中で、また木兎をなぶるんだわ。」
「あゝ、然うだ。」
「花藏だ。」　ーー　若衆が聲を合す。

「彼ン畜生、何時の間にか使えから歸つて來せて……　ちよろりと花藏へ潛りやがつて　……何うするか、見ろ、野郎。」

爺さまは、腰に提げた手拭を、兀頭へ引捻つて、一ツ辷らしながら、下葉を引分け、藏の縁へひよこ／＼。　……　雨がまた一時、店の草も颯と暗い、穴の上から浴せ掛ける。

「與四、與四郎。やい、與四公。」

唯、返事もせず呪文の如き地の下の異變な聲、

「いろはにほへと、アイウエオ、いろはにほへと、アイウエオ。」

唯、黄色な猫の目が二ツ、下にも二ツ猿眼、四ツ目のある怪ものが、穴の暗さを迫上つた。と、云ふものは、一羽、木兎を入れた金網の籠を兩手で、千代能が頂く桶の底抜けて、と言ひさうに出額の天邊へ捧げながら、面幅廣き鼻ひしやげて、横撫でをひかつかせたのが、穴から階子を踏んで出た。

通街八方、是沙汰の惡戯小僧。電信柱と相撲を取るやら、郵便箱の上の鯱鉾立、黒板塀で芝居のたて、假色は使ふ、浪花節は唸る、喇叭は吹く。就中、得

意は自轉車、諸鐙をガツシと合せて風車の如く乘出す、と爺様が大好きの講釋種を横啣へで、間垣平九郎藤原忠世と號し、はいヨーツッ　……　矢聲を放つて、鞍上に人なく、鞍下に馬なしだ、それと駈けながらの匍匐。が、其のかはり花主さきへ持つて行く、束にした花は枝ばかり、菊も、椿も薪雜棒。

「おや。」　と、とぼんと落馬して、路傍の溝へしよんぼりと遠見の折助、半纏着の間垣先生、身を投げさうに立つかと思ふと、

「そんな、手つきで金魚の餌が掬へるかい、貝杓子を貸しねツたらよ。」　と、小兒の手から引奪つて、蜜柑の皮を搔廻す。

此奴が、花藏の中からすぽりと出ると、腰のかひない爺様の捉まへる手が及ぶものか。一足立に、ひよん、と飛んで、店を見て居る娘の前へ、角兵衞冠の木兎籠、ぱツと掉つて、も一つ飛んで、

「ほツほう！」　と其の鳴聲。

「あれえ。」

緋手絡を飜然と紅く、薄暗い奥へ眞白な踵で遁込む。

「へい、えゝ、光らしてるばツかしで、晝間まるツ切見えませんや。えゝ、目が見えねえと薄のろく成つて覺えませんからね、暗い中で、晃々〳〵さしてる處で、いろはから行つてるんです。　……　いろはにほへとちりぬるを　ーー　」

與四郎は素早く美しい女と話をはじめた。

和歌子　ーー　美しい女もまた、もの好に小僧を庇ふやうに、腰掛を離れて立つたから、形容にも一つお打擲申さうとした爺様の皺びた拳固の遣場が無い。で、裏を返して額際を引擦つて呆れた顔色。

「鳥と云ふものはですな、私の考へぢや、嘴を開けて聲を出すもんでせう。」

と目を据ゑて、大意氣込な赤い面して、和歌子に話しながら、爺様の顔をきよろりと見て、

「……　えゝ？お爺さん、然うでせう。」
「何、何を言やがる。」
「それだもんですから、あの、　（わアかア。）
えゝ、此奴なら覺えるだらうと思ひましてね。
……　わアかア　ー」

はて、柄にもない、小僧は清い聲である。

「やつて御覽、もう一一度、　……　よ。」
「えへゝ、　……　少しばかり極りが惡いや。」
と、籠を、ふらり。坊主のやうな一分刈の頸窪をごり／＼搔く。

「極りが惡いが呆れらい、べらぼうめ、お客様の前ぢや撲倒すわけにも行かねえ。」

其癖、爺様は、撫でさうな手つきなり。萎えた掌、今度は苦笑ひの口の蓋して、
「御聞きなさいまし。　ーー　餘所からね、お前さん、其の木兎が來てからツてものは、間がな隙がな、こびりついて居やあがつてね、途方もねえ、大

丈夫口を利くだらうで以て、睨みツくらで、いろはにほへとを遣りますぜ。鸚鵡や九官鳥ぢやあるめえし、木兎がいろはを覺えて堪るもんですかい。處を、奴め、餘り夢中で、些と取逆上せた氣味合でね。何うやら木兎が憑移つて居るらしいんで、御覽じろ、顔色を。向合つた處は宛然、面形を取つたやうでがせう　……　串戲ぢやねえ、なあ、喜代公、段々相好が肖て來るぢやねえか。」

「眞個ですね、お爺さん、團栗目と云ひ、出額と云ひ、そら、恁ふ云ふ中に、唇を尖がらかす具合がね。」

與四郎は唐突に一本足で、ひよい、と飛んで、

「ほツほう！」

「可厭。」　と、娘のやうに、優しく、柔かにはツと退く、褄の揺ぎに、飛模様の絞つた緋が、花屋の店の花の中に、雨を誘つて、ちら／＼と白脛すれに尚ほ燃ゆる、雲暗くして、凄艶である。

構はず　ー　數散らした、花に、葉に、羽織の裾を引くばかり、今度は和歌子が、土間に踞むと、早や其主に心優しく、牡丹が色を映添へて、蓑蟲が化けた體の、木兎に對した面影は、鬢に時雨を掛けながら、瞼が颯と晴々しい。　……

「お爺さん、何處で、こんなものを捕へたの。」

美女であらうが、小僧だらうが、人氣勢の寄るとさへあれば、胸毛を搖り、下搔の翼を煽つて面一杯にぷうと膨れる。這奴禽中の河豚なるかな。かしりと留木を蹴直いて、

「何だ、こんなものとは。」　……　きゝ耳の押立つ事、毒ある鰭を振ふに似たり。

「川越の在でがすよ。」

「え、川越の。」　と　……　聞返す。

「なあ、喜代公。」

「えゝ、入間の在です。」

「埼玉だわね。」

「武州埼玉縣入間郡、伊草村だつけかな　……

花を買込みに近國を廻りますものがね、百姓家で生擒にしたと云ふのを、栗と一所に貰つて來たんでございまさね。」

と花政は剪刀をちよき／＼、カラ鳴りの手ついでに、一枝白菊の葉の蝕を拂つた。

四

話を進めよう。

埼玉の入間郡、伊草村で生立つた、不可思議な百姓一揆の斥候と云ふ形の鳥は、此の日、和歌子の錦木の宿へ、花政の店から籠ぐるみ引取られる事に成つた。　ー　隠居に何も木兎引の道樂あつて、望んで取寄せたと云ふではなし、栗も團栗蕎麥殼ぐるみ、苞に引包みに成つて江戸へ出て　……　第一囮に使ふ、あの、木の葉木兎と云ふのでない。札つきの怪禽、肩がきのある無宿もの。餌は活餌で、豚ぎらひの、牛も小間切では納まらず、鼠も胡麻で揚げろなどゝ、稲荷のおつかはしめ位な贅を言ふ。剩へ娘があれ／＼恐がつて騒ぐ始末。

「えゝ／＼お引取を頂きませう、願つたり叶つたり。晩の餌に買込んだ竹の皮づゝみと、金網の小屋は引出ものに差上げます。」

何の酒落だか、一人ものだからお婿さんに欲いわ、譲つて頂戴、と和歌子の言つた時、二言となしに爺

様が承知した。娘が嫌つたのも事實であれば、それに何の不思議はない。が　ーー　やがて、此の魔鳥が、おなじ素性の知れない美しい女の着古した長襦袢、　……　然りとは雖も、土佐繪に描いた篝火ほどは燃殘つた緋縮緬の袖で拵へて着せた、手縫の一重の外套を翼に掛け、同一緋の頭巾を頭に卷いた頬被りで、殘月琵琶の花に落つる時、霜の水銀の如き高甍の棟を傳つて、子爵槇ケ原家の破風口から館を襲ふ事に成るのである。　ーー　筍も三國一城を領した、角屋敷の要害を碎くのである。此を使つた美女は、其の夜は、緑の黒髪を背に捌いて、練衣の氷なす白衣にして、星より高く城の塀に立つのである。固より、それは後の事。

次手なれば、白衣の次第を言つて置かう。　……

此の女が自ら言ふ。　ーー　嘗て、露西亞、柴拉利亞　（はぶるすか。）　に渡つて住んだ事がある。たしか、政府が第十一軍團を置く土地で、軍隊を對手に東西各國の商人が入亂るゝ。　……　これも

商賣、と言ふべくんば、第紅い蹴出しに長靴を穿く、本朝天草産の女の身。南京の寶玉商人、北京の蜜柑、林檎賣。朝鮮の土方。印度の水賣。ぼるとがるの屠牛兒。米國の銀行家。佛蘭西の仕立屋、宣教師。倫敦の土木請負。土耳古の雪車曳、馬車屋なんど、人あれば火あり、火あれば雪あり、雪あれば風あり、そして横町に一つ宛黒い波のある中に、和歌子の居た丁ど鄰家に、猶太人の藥舗があつた。主人は陰氣な、人の可さゝうな苦い顔した男で、五つばかりも年増らしいが、容色の可い、目の鋭い女房が、星を占ひ、禁厭をし、祈祷をする。神巫だ、魔法使ひだと風説した。十八九に成る娘が一人。色の白さと言つたらない。別けて、黒髪を肩に流して、雪白の寝衣姿、蒼い蝋燭を灯して寝室へ階子段を上るのが、婦人の目にも悚然として美しかつた。　……　其の娘は日本長崎から傳來と稱へて、支那人から買つた、乙女、白玉とり／＼に、椿の鉢植を、吹雪の窓、暖爐の燃ゆる火の傍に、眞珠の如く、紅玉の如く錘愛した、　ーー　と言つて、近鄰のものに話すーー

これを可懐むのであらう。居まはりでは、和歌子の、白衣で黒髪を垂れた装で縁の雨戸に、蝋燭の灯を照して、雨を見、蟲を聞くのを知つたのがある。此で、其の話の中の女の状も偲ばれて、尚ほ其にも勝らうと思ふのに、眞似にも事を缺いた、品にもこそよれ、神巫、魔法使の娘だと云ふ猶太をとめの闇のひそみに倣ふとは何事だらう。　ー　これだけでも、其の性の知れない婦人であるのは言ふまでもない。斷るまでもなく、此の女は、町中に、唯一人住である。

錦木和歌子と云ふ優しい女文字の門札は、霞町、花政の大通りと家數八九軒、横へ曲つて商人交りの屋敷町の端を、路地を入つた突當りにある。すぐに鄰町からぐるりと塀を押し廻した槇ケ原子爵の邸で、錦木の宿は、恰も其の裏庭の地尻めいた處に、窓から唯一重杉垣を隔つるのである。

夏のはじめ、町内へ小さな虹の立つたやうに、浮草の根を留めてより、以來、生立も素性も今もつて誰にも分らぬ。　・・・・・　名と容子で、はじめは、

知らないが、女優かな。やがて琴曲教授、と云ふ札が出た。はゝあ生田流のお師匠さんだ。が、軒に風鈴の音もせず。かはつて、つゞれさせ、秋の蟲の、萬御仕立物所と成つた。しめたわと男どもが綻びを切らして待つと、　　……　　女髪結。

最も人を驚かしたのは露西亞語研究所と言ふのである。然し、其のいづれにも、弟子も註文もあつたらしい様子を聞かない。　　……　　勿論其の看板たるや、衞生組合、大掃除濟の札ぐらゐな大きさで、紙切に記して貼つて置くので。

「豆腐屋さん　　ーー　　油揚はあるかい。燒いたのが欲いのよ。　　……　　一寸、天麩羅見たいなもんだけれど、油揚は生ぢや不可いぢやないか。　　……　　そんなものは無いツて　　……　　不自由だね。燒豆腐を拵へるついでに、今度燒いて來ておくれな、後生だから。」

成程、小婢も婆やも要るまい、　　ーー　　飯などは滅多に焚かないと言ふ。

麺麭と、大概はハム。サラダ。ハムが無ければ皿サラダ。三日ぶりぐらゐ洗つた菜を積んで置いて、簪の尖ではさめば濟む。食卓に一人頬杖で凭かゝつて、手綺麗に麺麭を裂く。あとは紅茶か珈琲と云ふ處を面倒だから硝子杯を持つて路地裏の共同水道へ出て武藏の名水玉川を傾ける。もつと手輕なのは卷莨を横啣へに懷手でスツと出て、

「御鄰家の奥さん、硝子杯でも、茶碗でも。　ーー壊して了つたから。」

但し、工面のいゝ時は、朝から、てん屋もので酒と知るべきもの也。で、其の擧動は空を飛ぶ鳥よりも自由である。が、地上に巣くふ人間は彼の女ばかりでなく、魚もあり、獣もあり、別しては、妙な、變な男と云ふ、頭の工合から、手足の恰好いづれ不出來だけれども柄の違つたものが居る。何故か、何ういふ云ふわけだか屹と居る。其の如何なる種類の男が、出入るかは、暫時、讀まるゝ方の想像に任せて置く。

唯、當日、和歌子が通街の花政から家に歸る時分に、路地を入つてつ共同水道を前にした、其の錦木

の　ーー　此の頃は圍碁指南と札を貼つた　ーー
格子前に立つた男を紹介する　・・・・・　手織縞千筋の布子に、紺小倉の帶、髪を角刈にして、片手に番傘、中古の萌黄の風呂敷を、ぐにやり肩に掛けた、背のひよろりと高い、にきびのふいた若いもの、生々〳〵しいは顔ばかり、皺切つたる風俗。はてな、妖にして艶なる、主婦は、血の道の藥か知らず、持藥に八ツ目鰻の乾ものを用ゐるかと、不圖見て思はれぬ事はない。が、然うでない。飯倉片町に老舗の質屋、孫田屋六兵衞、孫六の年期ものゝ中に、正直と勤勉を以て聞えた、子弟の模範者たるべき、二十二三の年配が、然も名を佐兵衞と云ふ中手代、欽ずべき、二宮尊徳の崇拝家である。

風呂敷の空虛なのは、嘘をつかない象徴でなければ、質を持參したのでない。實は引奪りに來たのである。　・・・・・　此の機會を以て、棄利と云ふものを御存じない方々を祝福する。抑々〳〵棄利の所因たるや、自分の衣服を損料で借りて、着たまゝそつくりと剥がるゝのである。

時に、通街の花屋では、雨が未だ留まないから、持物はあるし、與四郎が和歌子を送る事に成つた。

「兄弟分だ、手前、背負つて行ねえ。」

言ふにや及ぶ、此小僧、惡戯の手があけたいから何でも背負ふ。木兎の籠を背中にゆらりと金網の紐を咽喉へ廻して、花政と書いた番傘をさし掛けた。

「お爺さん、然やうなら　ーー　一寸後見つきの輕業だわね。今度招魂杜へ出ませうか、喜代さん、御贔屓に。よ、」

と媚かしい掛聲で、軒下に引束ねた、南天の實の紅を、溝板越しに飜然と出る。褄より、引提げた牡丹が搖れて、濡地に映す淡い影。

「ほツほう。」　負けない小僧が、一本脚で身振で跳ねると、ぷツと膨上つた木兎は、目でぴか／＼と圓い稻妻、森の祠を思はする、街樹の落葉が二ツ三ツ。

油のやうな道の時雨に、白木の駒下駄、撫肩の後姿を、若衆も手を留めれば、爺様の腰も軒に伸びて見送れば、曲角が何とか云ふ質屋の黒塀、少し坂に成つてなぞへに低く打つた忍返しに、悪戯小僧の、高々と上げて一つ廻した番傘が引かゝつて、雫をしたゝか、袖をすぼめた、あの地摺なる牡丹の色が、其の時寂しく青く見えた。

雨やゝ暗し。　……

「茹出し饂飩　ーー」

五

質屋の手代は驚いた、こんなに肝を潰した事は嘗て無い。時雨の暮でも、まだ日の中なればこそ、路地を驅出したくらゐで、一ツ番傘で身構へて立直つた、が、夜で見よ、すぐに氣絶。

「お留守なのかな、御免なさいまし。」

一度格子を開けて見たが、下駄が無い。平屋で淺間なのが、火の氣も無さゝうに冷え切つて居るので、名さへ篤實な佐兵衞であるから、丁寧に腰を屈めて、江一格子を潛つて出た。餘りずか／＼と城の門を入つたので、寂寞とした樣子の不氣味らしさ、濱松の大手を武田の陣笠が窺ふ體で、出直して戸外から、もう一度、

「御免なさいまし、　　……　　御免下さい。」

勿論返事はない。

其の實、境木敏夫と云ふ、文展を落選した、何某學校出の、髪の長い、色の白い薄髯の生えた秀才の

兄哥が　ーー　此より前、留守へ入つて、待草臥れて、縁側つきの奥の六疊の眞中に、兀げた一閑張の卓子臺を小楯に取り、薄掻卷の天鵝絨の襟、白粉の薫と女枕の鬢の香に、綿は落ちても、赫と温つて、脊の高い男だから紺足袋の足を裾へ突出し、然も頭は引被つて、馴染に振られた引すぎほどに、目も心も暗に成つて、小庭の山茶花、艶に出て、時雨の玉水櫨へ走る點滴を、鄰家へ外れた上草履の音の思ひで居る處。待つ身にふてた了簡には、恁る折から男の聲は、劉備玄徳でも、時の内閣の大臣でも嬉くない。況んや掛取の米屋、薪屋、もしそれ然らずんば嫉むべき鞘當筋と、内證を知つて寝て待つくらゐ要害を心得て、棄利の使者の佐兵衞如きに返事をすべき若武者では無かつたのであつた。

雨は冷し　……　霞町に近い處、また出直すも億劫で、佐兵衞は格子前に、ひよろりと立つて、所在なさゝうに〓すと、背戸へ入る木戸があつて、さすがにこの錦木の宿なれば、柱も扉も鏡立ての形に見える。が、熟した念入りの絲瓜が一ツ、ぶらりと下つて、朝顔の交つた葉が枯々に葎に絡ふ。一輪、

芥子ばかりに、後咲きのあはれを夕暮近く、薄淺葱の、寒き、朝顔の花あり。　……　絲瓜を顔に枯葉の衣で、其の朝顔が鋲に似た唯一の胸の寶玉、露西亞の貴族が妖艶にして婀娜たる魔渡使のために、骸骨に成つて、會堂の屋根に曝しもので、振ら下つた　……　とも見えれば、こゝに、胸に眞珠を含んだ美術家が、和歌子の色香に、みいらに成つて、忍ぶ垣根を魂の彷徨ひつゝある風情にも見える。

とも思ふまい。二宮佐兵衛が、薄ぼんやりの癖として、正直まつとう、傘は、傘は、開いてさすのが色とも知らず、故と疊んで、石神に似た油紙の太い棒にして、篤實に、兩手で持直して、件の絲瓜の、鈍な、佐野の馬の面めいた鼻頭を、トンと蜻蛉で突上げた。

「はくしよん　……」

唯、鬼瓦が蝙蝠を吸つたやうな、へんてこな嘘をしたと思ふと　ーー　魔はこんな時に魅すと聞くーー　直傍の物置の戸が開いて、ひよいと顯れた妖精一體　……　呀、これにこそ驚いて佐兵衛は

露地を驅出したれ、夜だと目を眩すのは此の事で。

また、物置と云ふのが、これも麻布だけに氣の知れない、七不思議にも算へよう。向つて格子と、並んだ其の木戸との間を横に切つた羽目板に、蜜柑箱を重ねて打着けた、と云ふ、粗末な設計。家ぐるみ、ぐるりと背を向けて、（千手觀音をがんでおくれ。）とアイヌ出の巡禮が厨子を向けた形がある。

ーー　空地の無い切なさに、誰かゞ苦しまぎれの經營であらう、が、それも雜道具あつての事　ーー

今度の借主に成つてからは、炭俵に三俵法師、おもなるものは紙屑を一杯に突込んだ、鼠の巣だか、犬小屋だか分らない。

傘の蜻蛉で嘘を合圖に、辻堂の武者修行、裡から出たは、そも何等のものぞ。唯見る、身の丈三尺に足らず、（ーー　あの、槇ケ原子爵家に飼つて居る、仔細あつて町内界隈迷惑な）　ーー　洋犬の背よりも低い侏儒、水掻の有りさうな小さな足、だぶ／＼と突出た腹は蝦蟇ほどある。頭の毛髪が耳を塞いで、然も、もやしの産毛めいて獣の膚に異なら

ず、頭がこけて、額が小さく、下膨れの頬ばかり浮腫を持つて黄色いのに、口がやがて耳たぶへ、唇の小皺をゑぐツて、眉間に深い皺といもに、爺かと見れば童なり。血走つて眼が赤く、眉毛なし。瞼から兩の頬へ掛けて、てら／＼と赤膚に剥けたやうで、そしてギザ／＼の筋が入つて、粘を帶びて、じと／＼して、腐つた西瓜に髣髴な處へ、また嘘のやうに、頭の皿が兀げて居る　……

うまくない。恁う記しても、彼奴の形骸は寫されぬ。近頃は影をひそめて、字書を引いても想像的動物と成つて不都合な。近い處で荒川か、離れて印旛沼に居てさへくれゝば、二字で分る、河童。と同じ人間の、生々〳〵としたのである。

だらん、と兩袖の千切れかけた長い袖の、棒縞のどんつくを、青ざめた胸はだけに、裾をびしよ／＼に着て、汚れた綿心の出た、赤い腰紐を胸高に一ツ卷いて、尻に輪にして端をぶら下げたのが、大な絲瓜を横啣へにして噛りながら、大正年間、世界に於ける大都會、東京麻布霞町の錦木の物置から、恐れ

多くも、天にまします基督に、仕掛けでバタリと樂屋から戸を開けさしたやうに出て、蚯蚓色した小さな手で、件の絲瓜を噛り／＼、涎と水洟をだら／＼、濡れじとりの頬邊と、あの口を、一齊に赫とあけて、白い反齒で、ものをも言はず、ニヤリとして顔を視た。

顔を見られたのが、十五年奉公して質屋に成るのを夢にも忘れぬ、二宮の氏子、佐兵衞である。

「あッ。」

と、番傘で頤を支いて、胸を板の如くに反る處を、赤面の切禿が、鳥のやうな赤い指で、露地口を指して、

「うゝッ、うゝッ。」　　・・・・・　涎をだら／＼と口を利いた。

駈出さずば成るまい、姓は二宮、名は佐兵衞。

一一　時に詰るものあり曰く、談者は、餘りに奇を語る。絲瓜が食へるかと。答へて曰く、妖精ゆゑに噛るにあらず、薩摩に於ける尊徳宗の信者は大名

と雖も絲瓜の清汁で七五三の祝に賓客を遇するのである。然うした向の説を聞け、冬瓜の葛かけ、病人でゴハンすか、何、芝蝦を入れると？　腥臭。

駈出した佐兵衞は、しかし餘りの事に、番傘を握つて、退りながら、町から、露地の奥を覗き込むと、侏儒は雨の中で朦朧として、且つ消えず。油繪で塗つたやうに明かに正體を留めて、お剩に花政入道の其の如く、前屈みに腰を屈めながら、赤い指で、また指示する。　……　其の指で、操られた體に、ぼんやりと踵をまはして、佐兵衞が見遣つた町中の、早や其處へ、與四郎小僧のさしかざす、傘にも映る牡丹の影、友染捌き艶麗なり、羽織の黒も艶墨に、浮いて揚羽の蝶の紋。

「すて利だ、あれを剥ぐのだ。」　と、一生懸命に念じながら今、來かゝる辻の紅殼塗の、こんな確なものはない、活きた血の通ふ世界を見つゝ、しかも、其の郵便箱を魔道の榜示杭のやうに思つたのである。

南無三寶、近くと、木兎を背負つた鴟梟小僧。
佐兵衞は横なぎを啖つて、　ぼうと成つた。
が、確りなさい、二宮氏。なか／＼、こんな事ぐらゐでは濟まない。

「おや、お早う。」
晩方だのに　ーー　和歌子が莞爾。
「來たね、彦ちやん、おい、彦六。」

きよとんとして顔を見た。が、媚かしい人の聲に、性根が漸と戻つて心付いて、
「えへゝ、孫六の手代佐兵衞ですよ、彦六ではありませんですよ。」　と、眞面目なもの也。

「生意氣お云ひな、三途河の婆さんの、其の孫のまた使ひぢやないか、難有くお思ひ　……　彦なら　結構、曾孫で澤山、眞個は細螺だあね。　ーーおいで、彈いて上げるから、」

と澄まして露地へ入るのを、背後から隨きながら、入口で立留つて、おつかな吃驚、侏儒を透かして覗

く。

一度、婀娜に細面で、眉も目も、くつきりと白く見向いて、

「おいでな。」

と、も一度莞爾した。が、唯振返つて、侏儒を見て、

「おや、芭蕉實、お河童、ハイカラだね、一寸。」

「うゝツ、うゝツ。」　と、再び指す。

入り掛けた佐兵衞が又退つた。

「留守に來たツてんだらう。分つたよ、難有うよ。寂しかつたらう、其の代りね、お友だちを連れて來たよ。」

さすがの與四郎、一本脚で飛べもせず、これには恐れたらしく、羽目について横摺りに退下る。

其の背の籠を、トンと叩いた。早まつた　ーー連れて來たと云ふ友達は、木兎の事である。

河童(かっぱ)は、扨(さて)は、和歌子(わかこ)が飼(か)つて居(ゐ)る妖精(ばけもの)らしい。

六

實は、此の秋の彼岸に、和歌子が雜司ケ谷の方へ行くと云つて出掛けた。其の歸途に連れて歸つたものである。

「御參詣でございますか。」　……　はじめ、訊く者は、殊勝な墓參だと思つた。

「否、花を摘みませうと思つて。」

黄昏に、炬火の如く、角の酒屋の店を赫と燃して町内へ入つて來たのが、（月見草もまだ咲殘り、嫁菜の花、萩も思ふまゝの折からを、）　雁來紅、せめて薊でもある事か、曼珠沙華？　で、そればかりを、薪木ほど束にして、あの異相醜惡な侏儒に背負はせて歸つた形は、可怪、狸の背に火を點して山姫が來たやうに見えた。

「變つたおもの好で。」

「はあ、まるッ切獨身なんですから、心細いんですもの。不意に息を引取りました時のお線香がはり。

冥途の炬火にするんです。」

あの、絲瓜の木戸にも五六本、床の間から手水鉢、小さな庭へもすく／＼と突挿して、當時は月夜に赤かつた。　・・・・・　此の魔の火の灯れた中に、窈窕たるのが下髪で白衣で、蝋燭の燈で、赤爛れの面の侏儒と、卓子臺のお取膳。白丁から直接に硝子杯の冷酒を煽つて、サラダを突いた處は、此の世とまでは云ふまい。日本國にあるべき事とは思はれぬと、霞町にも、隨分、婦人の嫌ひでない男は多いが、いづれも垣間見て舌を卷いた。

扨、露西亞の錦木塚とでも言ひさうな和歌子の宿へ來た、侏儒は、其の日、池袋から拾つて來たのだと言ふ。

甲武線の彼處で、其の曼珠沙華を引抱へて乘つた電車の中に、和歌子と鄰合つて、秋の彼岸と云ふのに絞の浴衣に、唐桟柄の古半纏、白い湯具の裾端折、脚絆に白足袋、日和下駄、剥貝絞の手拭を吉原被りにした、汚い風呂敷包みに片足を乘つけて、煙草を

飲んで居た、鼻の高い、目の　冴えた色の白い、眉毛を落した大年増があつて、侏儒が、ちよん、と其の肩へ腰を掛けた形に腰掛へ立つて、べろ／＼舌の尖で、硝子窓を舐めながら、田畑を視め／＼、電車の走るまゝに、ちよろ／＼と乗合の背中を潜つて腰掛を傳つて歩行いた　・・・・・

年増の風采が、淺草の馬場裏、新宿の追分邊から出る女猿曳、古女房のおわんわん、蛇遣ひの口上言、と云つた様子なれば、夜啼石の種小僧か、それとも生のもので、千住大橋箔づきの見世物であらうと思つた。　ー　年増は成程新宿で下りた、が、河童は瓢單ぶつくりこ、と乗換の電車へ又浮いて出て、和歌子が、目黒で下りた時、後について一所に下りた。が、手ぶらで何にも無い、ばけものゝ癖に尻尾も無い、勿論、切符も持たぬ。

驛員が持餘して居るのを見て、和歌子が賃錢を償ふと、うゝ、うゝ、と指を噛み噛みお叩頭をして、附着いて後から來る。晩方で、野掛の遠出、持おもりのした狐の蝋燭、曼珠沙華を背負はせると、ひよ

こ／／供をしたと言ふのである。

「お給金なし　……　こんなのでなくつちや遣ひ切れない　……」

で、丁稚とも、居候とも、男妾ともつかず、其の日から居てついて、あの、物置にも寝れば、縁の下へも這入む。疊には固より勝手、臺所、屋根を這はないばかりの代もの。

言ふ事は解るらしい、何事も合點々々。

《うゝッ、うゝッ。」

が、口が利けない。　……　然うかと思ふと、七八歳の童形で居て、時々／／六七十ぐらゐの爺の聲を、前世で咽喉へ嵌込まれたやうに皺枯れた音を出す。恐らく魔界の蓄音器と云ふのであらう。

共同栓で、日向ぼッこで、河童獨吟す。

「油蟲が煩いわい、うゝッ、うゝッ。」

思ひも掛けず恁う云つたり、　　……　また耄けた聲で、

「姉さんやあ、そろ／＼水道の水は冷からうねえ。……　井戸の水はね、冬は暖あいものだよう。」

「きやツ、」　と云つて、ばけつを投出して遁げたのは、家竝びの官吏の令孃。

「小母さん。」

若い銀行員が、些と色事で、新世帶と云ふのゝ臺所口を覗いて、小春日に甲羅をほしの、悠々と踞み込んで、

「鮗は魚田が旨あい。ーー」

小鯵を燒いてた、小母さんが、納まらない、漸と二十の御新造さん。

時に、同番地に草分と稱する、娘の時に高杉先生の顏を見たことのある、長州萩の士族で、野面聲の大い、學校用具店、百年堂のお婆さんを頭領に、町内連判で、河童退治を迫るべき筈の處、天の配劑奇

なる哉、不出來しな上野の銅像も、椋鳥のためには、照降の天氣豫報に成るのである。

とも思へるし　……　悲觀すれば、獸と、鳥と、人間と、洪水と、地震と、飢饉と、戰爭とが、相接近する前兆であらうも知れぬと思はれる　……が、此の侏儒を、却つて町内で、祠に祭つて然るべき事が出來した。

他でもない。

槇ケ原子爵家に、やがて小牛ほどな黒の洋犬が一頭飼はれる。　……　館の姫様、三太夫、御門番に到るまで、此をばトーマスと呼ぶのである。が、面附のツぽで、圖體の大い處から、居まはりの小兒からはじめて、頓馬々々、と呼びなす

ーー　性質は頓馬だが擧動は猛虎の如しで、辻から唐突にぐわツと食ひつく。自轉車乘は引轉覆る、車夫は溝へ嵌る、自動車はぶう／＼唸る　……ぬツと立つと大人より脊が高い、小兒は頤の下に挾まれる。見境の無い事は、館の料理番さへ噛まれて

血塗ろに成つて玄關前へ打倒れたし、小間使が島田髷を啣へられて仰むけ様のちらし髪、羽織を破られ、袖を裂かれて、使ひあるきの女中たち、ひい／＼悲鳴を擧げる事近所に幾度なる事を知らず。申上げます、電話、はがき、管轄の警察へ注進櫛の齒を引く如し。で、獸醫が警官と出張する。出張する、が、幾度檢診に及んでも更に狂犬たる事を認めない。撲殺思ひも寄らず、小塚原へも棄てられない。元來子爵家の飼犬である。然も其の由緒を糺すと、時の内閣、何某伯の官邸から、槇ケ原家へ遣はされたのである。閣下と御前の御聲がゝり、町人如きの言條が通るべき所謂はない。

が、難有い事には、天に神明あり、地に明法あり。夜ふけは何うやら鎖で繫がせる事にした。けれども餘り窮命をさせると、却つて狂犬に成る恐れがあるとて、手加減で、午後の十時を過ぎると解放。さるゝが否や、暗の黒犬、月夜の灰虎、塀の蔭から、垣の下から。

キヤツ、キヤツと町内、けたゝましい男女の聲々。

狂犬でないのに、何が故に人を噛む歟。曰く、トーマス饑ゑたれば也矣である　ーー　草分の説によると、はじめ大臣閣下から、當所の御前へ、婿入

（男犬）　當時は、温柔羊の如きものであつた。

・・・・・　が、澤庵の尻尾に冷飯ばかり。トーマスは薪屋の炭俵を噛み、やがて薪雑棒を噛つた。床屋の店へ入つて、べろりと散髪の毛を甜めた。中にも女の脱毛を漁つて、ともすると、長い髪の毛を横啣へにして、然も甘さうにしやぶつて、のそつく。そんな時は、あはれなるより寧ろ凄い。

ーー　病ではないが、空腹のゆゑに人を囓むのだ、と言ふのである。

子爵家の御手飼が餓じいなどとゝ、馬鹿を申せ、

・・・・・　そんな事は、警察で御存じない、勿論、派出所に於てお取上げに相成らぬ。

惨憺たるものは夜遊びの男どもで、漸と工面の出來たのは俥で歸る。　・・・・・　勘定ぎり／／のなんぞは、早や花政の通街の角から、疑心黒犬を生じて、

圖の惡さは、洋服で立窘んで醉も醍め果て、せめて電信の配達夫、とばかり待合せる。よく／／困ると、もり蕎麥を誂へて出前持と一所に、こツ／／。

氣の毒なより可笑いのは、夜、錢湯に行く女連で、向三軒、兩隣。今晩は、今晩で誘ひ連れる。　：：：　こゝに一人、陸軍中尉の令夫人、洋杖を支いて先陣を承り、令孃、御新造さん。百年堂の婆さんが同じく洋杖の殿で、上總と房州のお三どのが兩翼に備を立て、長蛇、鶴翼、車がゝり。

「わゝわん／／。」

あれ、きやあ、と悲鳴で散る、と、お婆さんが夢中で、曳と長刀の大上段。

唯見ると、其の洋杖の持主なる、早稻田の商科へ行く、脊高の其の一人息子。

串戲ではない、實は泣くより笑であつた。

處を　：：：：　天の配劑である　ー

四邊、八方、トーマスの長面が、胴を畝らして、處嫌はず顯れると見ると、塀の暗、門の月、何處からでも、侏儒がちよろ／＼と出て來て、うゝ、と吠えるのにうゝ、と合せて、這奴餓虎の胴中へ、横抱きに抱ついて、背中へ、うつむけと成つて、ぴたりと乘る、と、其のまゝ頓馬が、ぐな／＼と萎えて、赤い頬邊を嘗めながら、載せつゝのツそり町を行く。是即、河童太子、玄車に乘り、鐵驪に駕し、黒旗を建てゝ暗夜を駛る　……

……　可怪き額の抜繪である。

和歌子が湯歸りの薄化粧なぞで、唯出會すと、其の天邊の皿を、雪のやうな手でポンと叩いて、

「お河童や。」

近所の手前、河童は餘り露骨だとて、上へ　（お）の字を附けて呼ぶ　……

「夜遊びかい、　……　浮氣もの　……」

七

「手前より俺の方が驚かい。ものの五町とは有るめえ、一跨ぎの使が、もうやがてこれ二時だ。」

花政の爺様は、奥の六疊に、夜は樂隱居、寝々衣で、とつちりと膳の前。ちろりの燗、。黄鮪の中脂、時雨に通ふちり鍋にも事は缺かぬが、老年の冥加と、先づ／＼手製のなめものをして行る處。

「惡戯にも、なまけるにも、ものには度と云ふものがあら　……　馬鹿も手前ぐれえに成ると、呆れが宙返りをして下腹が擽つてえ、な、たとへば此だ。」

と、火鉢の傍へ突出したは紅白の水引のしめ高で、朝比奈が床几に掛つたと云ふ進物也。

「雑と端書ほどある名札を拝め。子爵槇原家執事、近藤友英と　……　あゝ、實に勿體ねえ、花政風情へ、紋着羽織御袴で御上使だ。先刻奥方様に御用

立て申上げた傘が御返禮だ。中味を何だと思ふ。藁半紙九枚、九枚九枚、と云つても同じ事よ。半死半生と云ふ酒落は聞いたが、こいつは九死一生だ　・・・　ものには度と云ふのがある。呆れが宙返りたあ此だぜ。金銀張分のきらびやかなる處の御袱紗が掛つて、白木の臺附。袱紗と臺は下さるんぢやねえ。腹切刀の九寸五分でも御返上申すのだ。此奴を頂戴に及んで、舐めて取つたなあ大星由良之助ばかりだと思へ。　ー　また此下されものを取次いだ内のお光と云ふ奴が、何と、目八分に据ゑて、俺がな、此の爛銚釐へ手を掛けた處へ持出すのに、摺足で、テトドン／＼と言やあがる。彼奴も不出來な江戸兒だ、そんな了簡方ぢやあ、」

と口を大きく開けて、臺所に、嫁のお久と云ふのと一所に、肴の二番手を見せようと小まめに働いて居る娘の方を透かして見て、フト低聲で、

「な、碌な婿は持ちやあがるめえ　・・・・・　俺あ、もう此の年紀だから仔細はねえが、恁う成ると口より手の方だ、水を浴びせるより火を放ける方が疾え

のよ　……　ものにやあ度と云ふのがある。」

其の癖、叱言の口よりも爺様はちろり酒の醉が廻つて居て、

「よく、手前、店へ入る處を天秤棒で向脛を打挫かれずに助かつたな。」

仰にや及ぶべき。

「怪我をしてよ、眞個に　ーー」　……　お光の情で、天秤棒は、高箒とかはつたが、喜代吉は手ぐすねを引いて軒に夕荷の着いた、菊を積んだ花車の蔭にかくれて、手ぐすねを曳いた。　ーー　和歌子を送つて三時間強、とツぶり日が暮れてから、其の横町の角へ、與四郎の浪花節　……　降り來る雪に赤合羽、赤垣源藏武重が　（此の義士の名のり誤謬なるべし、少時小僧の口ずさみに倣ふ。）　と聞え出した時である。

「ほツほう。」

小僧は一本脚で、ひよいと飛んで耳へ兩手で木兎

の影五尺。

「此ン畜生。　……」　が後手に成つて、高箒の柄が流れる。店の敷居を刎越して、突然奥の隱居の前に、倒に成つて叩頭した。手も附けられない次第なのであつた。

「な、但し少々痛えぐれえで性根の附く野郎ぢやねえ、一番は斷食だ。晩飯片餉、處置をして遣らうと思へば、天麩羅蕎麥を四杯御馳走に成つて來たと言やあがる。食はせも食はせた、啖ひも啖つた。天道是か、非か、と言ひてえや。　ーー　お光坊や、お銚子のかはりめだ。」

「嫂さん。　……　何うでせう。」

と嫂のお久に、お光が小聲の壁訴訟。　……

「お爺さん、そんなに、可い事。」

花政又た、もんぐりと口を開けて、

「天道是か、非か、默つて持つて來な。酒だと思ふめえ、與四に説教のお茶湯だ。大和尚、然も禪坊主如意でくらはせる、と云ふ豪いのだ。」

と大な聲して、

「で、何か、あの、別嬪が裸體に成つたか。」

と首を掉つて、音の調子を掠らせる。

「へい、内のお光さんのやうな、緋縮緬の、あの。」

「そんな事は何うでも可い。で、何か、質屋の使えに渡した譯かな。」

「へい、（そツくり持つといで。）　然う云つて、お乳も、胸も、白薔薇の花見たやうなんです。」

と與四郎は、露出た膝小僧を坐直して、せい／＼と胸を撫でる。

「あの、姫様々々としたのがな。」

「だもんですから、質屋が驚いたんで。へい私も驚いたんです。」

「俺だつて、驚かい。　……　光坊や、お手が鳴るよ。」　と、火鉢の縁を雁首でごつんと敲く。

「私だつて、驚くことよ。」
與四郎がもぢ／＼と、膝で、ずり下る傍へ、お光が來てちろりを掛ける。
「まだ、其のくらゐな事ぢやございませんです。衣服を脱ぎますとね、お爺さん、いきなりそれで以て、其處に敷いた掻卷の中へ、肩まで、すぽりと潜つたんです。私はお孃さんだと思つてましたが、あの錦木さんは奥さんなんでございませう。」
花政入道瞬をした。
「何は、お酌はよし、　　……　臺所へ引退んな。」
「一寸、何の話？　父爺さん。」
「叱言だ。叱言を傍で聞くと耳が押立つ。」
「可厭な、木兎ぢやあるまいし。」
「其のかはり、目が附着いて睡く成る。おかぶさな。」

「知らないわ、そんな事を言ふんなら、かくやを刻して上げないから可い。」

「そらの、其處で又口が尖る。　……　此の、うけ口と云ふのは張出しの美人の部だが、お前のは尖つてるんだ。」

「知らない。」　と、トンと立つ。

「温習なよ　……　此處の合方は、一條戻橋などと云ふのが可からう　ーー　で、何したんだな、與四。」

「奥さんが、あの何でございます、　（おゝ、寒い。）　然う云つて、掻卷の中へ入つたんで、驚いて中からむツくり、男の人が起上つたんです、へい。」

「どんな野郎だい。」

「野郎ですか、何ですか、髪の毛のもじや／／と長い、鼻の高い人なんです。」

「髪の毛が、もじや／＼と長い、鼻の高い、ふん。あの女が、はてな／＼、　……　ふん、いづれ變つた男ではある。」　と、酒の呼吸に似ない、老耄れたものの言ひやう。

「奥さんは掻卷を引被りますし、其の人がむつくり出て、卓子臺へ、髪をばらりと遣つて、あの頬杖を支いたもんですから、其の質屋の若衆が吃驚して、……　座敷の入口で、奥さんが上下脱いだ衣服を　……」

疊を撫で／＼、

「あの、恁うやつて、袖疊みにしい／＼居たんですが、長襦袢ごと引抱へて、風呂敷にも包まないで、格子から駈出しました。　……　私は、木兎の籠を持つて木戸から入つて、庭で、縁側の處から見ました。へい、質屋が露地の羽目へ衝突かりさうにして遁げたんです。」

「與四公、其處だ！　な、ものは等閑に見るなよ。これ、話の河童小僧なり、別嬪が素掻卷なり、娑婆

の事とは思はれねえ。不意に出會して見ろ、火がかりの馬連に火がついたよりか、此の俺だつて目が眩ばい。　ーー　處を、逃げるのに衣類一襲を持つて駈出したは豪い。講釈では、臣として四方に使して君命を辱めずと言ふのだ。然う云ふ若衆が、後年出世をする、やがて帳尻を預からうと言ふものだ。手前なぞは眞似も出來めえ。あゝ、さすがは飯倉の辻の角屋敷を張る親質の御大家だ。いゝ奉公人が居なさるの。」　と、醉が廻ると、少しぶる／＼と成る癖あり。爺様の獨り頷く形は、娘が冠を振るのに似て居る。入道にして此の言あり、佐兵衞知己あり、で、二宮氏以て瞑すべし、と思ふと、與四郎が上目で見て、一寸うつむき、擽つたい顔をして、

「ですが、あの、何ですか、利息を持つてくのを忘れて駈出したんですつて。」

「何！　棄利の金をな、はてな。」

「七月分　ーー　（まあ助かつた。）　つて、奥さんが、素肌に掻卷の襟を合はせて、くるりと起きましたんですよ。」

「あゝ、天道是か、非かい。」　と横向きに成つ

て、入道方丈眉の白いのを、天井高く、煤を拂つて憮然とす。

「そして、あは／＼、男の人も笑ふんです。」

「天狗笑と云ふ奴だな、可恐い、化もの屋敷だ。はて、御維新前、此の山の手邊土の惡旗本、御家人の屋敷には、得て然う云ふ素披抜きの町人泣かせがあつたもんよ。然うした邸には、得て今以てあかずの間と稱へるのがある。　ー　怪もの序に、其の河童小僧は何うしたな。」

「火の氣が無いんですから、奥さんのいひつけで、あの臺所の隅に踞み込んで、七輪へ起すツて、あの、曼珠沙華の枯れた莖を焚附にして、燐寸で古新聞を燃したんです。」

「何、其の樽柿面の小僧が、臺所の隅で、七輪で……　燃したとえ。いづれ、青い火が、めら／＼となる。あゝ、以前、此の、川施餓鬼の後ぢや大川筋へ、そんな亡靈が顯れて、筏乘が腰を抜かしたものよな　……」

と兩の頬を窪ませて、縁を鎖した障子を視めて、
「まだ、止まねえ、雨は降る。愈々以て尋常ごとでねえ。其處で、手前、天麩羅蕎麥か、いづれ、蚯蚓ではある　……」
とまた老いたことを言ひながら、ちりの汁を、ひたりと一口。

「此とても、さて鯛でなし、鰒でなし、魴鰯だ、……　天道是か非かい、與四公。」　と大な聲。

「否、貝や、魴鰯ぢやありません、天麩羅は蝦でございました。」
花政苦笑して、
「天道是か、非かい。分つたよ、だが、くらひも食つた、が、四ツとは驕つたよ。」

「えゝ、其の驕なんですけれど、奥さんに工面が着かないんです。木兎でさへ牛肉を食べてるのに、ーー　私が頬張らして居たんです　ーー　（恁う四ツ顔を揃へて、）　ツて、錦木さんが　……」

「四個と　……　待ちな、河童を入れてだ、手前も其の面の一個だな。」

「へい、一個です。」

「威張つてやがる、天道是非とも行かねえや、弱らせる。」　と、今度はなめもの。

「　……　（一寸、金入をお出し。）　奥さんが、其の男の人の袂から引張り出して見ましたつけ。（まあ、入ものばかり紅革で、中は何だい、電車賃が漸とだね。）　ツて、がちやりと縁側へ投出して　（小僧さん、お使賃。其のいれものだけだよ、中味はお約束した月賦だよ。）　然う云つて、あの……」

と、膝頭を撫でゝ、押立尻で、丼へ手を突込む。

「待ちな／＼、此處で木の葉になんぞなられちや、鼠が天井から煤を落す。　ー　何うだ、　……牡丹は活けたか。」

さすがは月三齋、本性違はず。

「それは、あの、手水鉢に突込みました。」

「や、假にもせよ、あゝ然う云ふのだ、工面がいゝと、香水を流込んで、牛の乳で行水をすると　……光やが、此の頃活動寫眞の口上で聞いて來た。唐天竺の女にあるとな、提婆達多のお妾だ。」　と、つまを利かして、黄鮪をつるり。

八

与四郎は自ら號した、天麩羅四杯の腹中なれば、今夜ばかりは刺身も羹汁も閑却した顔色で、

「木兎の、その、木兎の何だツて云ふんです、牛肉に對しても、四人揃つて何にも飲食をしないでは、水を吸つてる牡丹の花にだつて極りが悪いツて、また奥さんが然う云つて、ですけれども、酒屋から煙草屋仕出屋、蕎麥屋、八方塞りで何處だつて貸さないし　……

貴下は空懐だし　……　奥さんが云ふんです。

髪の長い人は弱りましてね、頭を掻いて叩頭をしたんで。其から奥さんが、火の起りかけた七輪を卓子臺の上へのつけて、掻卷の袖から、白い手を出して當つて居て、いきなり袖を敲いて莞爾して、（いゝ事がある、河童の見せものを拵へて些とばかし小遣を拵へる。丁ど可い、しよぼ／／雨に酒を買ひに行く形に誂へよう。）　（頭へ被せるに借りて

歸つた番傘ぢや配合が悪い。杉葉が可からう。）
と男の人が言ひますとね。其の杉葉が不可いんですつて。　ーー

あの、彼家の竹垣の外が、すぐに、裏町の槇原ツてお邸で、境に杉垣がある。いつか、餘り騒ぐから鼠の穴を塞がうと思つて奥さんが、其でも默然ぢやよくなからうと、あの、お邸の小間使が、二人でほしものを取込んでるのに、垣根越で、二葉三葉杉の葉を頂きます、と念のため斷つたら、その、何です、……　お待ち遊ばせお、お上へ伺ひを立てますから、　ーー　然う云つて一人が駆込むと、其の一人が殘つて見張つてたんですつてさ。

すると、あの少時すると、被布の肩で風を切つて反身で、頤と眉間で見當をつけて、お邸の奥方様がお立出で遊ばされて、垣根の處で、袖から眼鏡を出して、ぎら／＼と光らせて、上下左右を見廻いて、其の、（其のな、枯れた葉、枯れ葉。）とおつしやると、鋏を持つてついて來た小間使が、ちよきり／＼、それを垣の上から、ぼとん／＼、ばさり／

／＼、」

「葉ッ葉の假聲は餘計だよ。」　と、爺様はむず／＼痒さうに眉毛を撫でる。

「へい、此方ぢや、奥さんが默つて内へ引込んで了つたんで。窓の外が埃に成つたのが落た、と云ふんです。一度謝絶を突かれたんだから、杉葉は不可い、何うせ引毟るんなら、斷りなしに枇杷の葉が可い。

此奴を毟るのが私の役です、へい。　……　錦木の屋根へ被つて、古井戸を一ッ越して、お邸が物置へ屆く大な樹で、實の生る時には町を通つても屋根越に見えるんです。いつでも取りてえな、もぎりてえな、と魂魄此の樹に留まつてら、葉だつて構はねえ。いきなり飛上つて、一束引斷つ了ひました。」

「馬鹿野郎、何うするんだ、其を。」

「河童の頭へ被せたんです。」

「かつばの皿へ枇杷の葉を　……　鮹だと即死

だぜ、ふん、それで　……」

「跣足です、胡蘿蔔見たいな空脛を端折りましてね、貧乏徳利を振下げて、河童も可笑いんだか、ニヤリ／＼露地を出ると、あの、黒い處へ、水仙と菊の花を彩色した柔い搔卷を素肌へきたなり、褄を取つて、錦木さんが、（舞臺飾だ。）　然う云つて、先刻の牡丹の花を持つて、あとから露地口へ出かけたんです。」

「やれ／＼、天道是か非かい。」　と少し開かつた襟を合せ、其の癖乘出す。

「河童が、前町を横ツちよに、あの、越長（酒店を云ふ。）　の方へ行かうとすると、奥さんが牡丹の枝の眞中を取つて、スウと指して、（づツと一廻りして　……）　然う云つたもんですから、逆戻りをして、びしよ／＼、びしよ／＼、郵便箱の處まで。それから、又しよびたれ／＼、びしよ／＼歩出す　ー　知つてゝも薄氣味が惡いんでずぜ。犬より小さい、古鼠が立つて行くくらゐにしか見えねえんで。

（ありツたけの聲をお出しな、口上を頼むわ、旨いんだらう。）　錦木さんが私に云ふんで。旨いもんですぜ、へい、私あ。東西、東西、東西！」

「金切聲を出すな、馬鹿野郎、店のものは、俺が叱言最中だと思つてらい。」

「えゝ、御覽なさい箸、火吹竹ツ、晩のお支度お忙しうはござりませうなれども、御町内は御總客様、御覽なさい箸、火吹竹ツ、河童川渡り欄干づたひ、酒屋へ三里豆腐屋へ二里、姉さん、お若い、小僧は七ツだ、　ーー　何でも出たらめに喚いたんで。皆出ました。軒下やら格子前から、窓から三つも顔が覗くやら、往來が立留る。　・・・・・　（木戸錢木戸錢。）　と錦木さんが牡丹の花で、美しい呪もんを稱へたもんですから、お立合魔法にかゝつて、　・・・・　えゝ、集めに歩行いた私の手へ、ザク／／と入つたんで、中にや五十錢銀貨が交つたんです。」

「發奮んだ奴だな。」

「私だつて發奮みたうございました。河童より、

女の太夫が、へい、」
「默つて饒舌んなよ、ふん、さて／＼　……」
「巡査が來ました、へい、丁ど交番のが通りかゝつたんですね。」
「然もあらう、天の然らしむる處だな。いづれか鬼のすみかなるべき、とあるわい。　……　大目玉を食つたか。」
「否、畠山さん、」
「知つてる巡査か。」
「重忠様です。」
「怯かすない、此の野郎。」

「雨の外套の下から、洋刀を光らして、傍へも來ないで向側から、（　ー　餘りお轉婆が過ぎはせんですかあ　ー　）　然う言つたんです。」
「はてな。」
「錦木さんが、内のお光さんのやうな柔い聲で、（はい、）　……　云つてね、莞爾して、羽目の方へ顔を横に向けけますとね、それなり、あの、

ぽくり／／と靴が郵便箱の角を曲つて了ひました。」

「以前、權十郎と云ふ役處だ。成程な。」

「此方より、近所の人たちが、極りが悪いかして引込んだんです。　ーー　巡査の叱言には然うして莞爾したゞけですが、私が酒屋へ勘定しに行つて歸つて來る、と、錦木さんは何うしたんだか、搔卷の天鵞絨の襟から、頸を白うさげて、うつむいて、牡丹を見て泣いて居ました。」

「何。」

「廂合の雨垂落で、雨水がちよろ／／と流れたのは、牡丹の色が、あの、雲切れの、白い空、薄赤い雲のやうに映ると、そればかり明るく見えて、もう暮れかゝつて、やつぱり、しよぼ／／降つてるんです　ーー　歸つて來た河童が、其の袖の下へ附着いて、じろりと顔を見ましたから、何だか露地が小川の流で、美しい夫人を河童が引張つて行くやうでございましたぜ。可厭に心細くつて、寂いんで。　ーー　然うすると、チゝ、チゝ、と宿餌がすんで、絲の

やうな聲で、雀の親子、旦那と女房とが、おやすみ、おやすみ言つてるのが　ーー　夢見たやうに聞えるんです。」

「其處だけしをらしいや、與四、手前も片親ねえ奴だ。」

ほろりとして、横を見て、

「で、何うしたよ。」

「雀が鳴くと、然うやつてた奥さんの顔が暗く成つたんですが、家から、男の人が、づか／＼出て來て、いきなり、天鵞絨の襟へ手を掛けて抱くやうにして、而して、錦木さんの手を握つて、　　……」

「此奴は、困らせる。」

「否、ですが、其の人も泣いてるんで。」

「はて、分らねえ。」

「然うするかと思ふと、奥さんが、其の手を拂ひのけると、とんと羽目板へ掌を、辷らして、蹌踉けようとしたんですが、急に、其の、威勢よく、

（お河童御苦勞。）　然う云つて、牡丹の枝で河童の皿をトンと敲いて、（與四公。）　すぐに私を呼ぶんで、もう、ちやんと名を知つてまさ。」

「其處が魔ものよ、　……　な、狐、狸、天狗をはじめ魔性のものは、直ぐに人間の名を覺える、」

「えゝ。」　と、怯えた顔をする。

「うんや、驚かすんぢやねえ、何また、手前が魔ものなんぞに驚く風かい。」

「お爺さん。」

「何だよ。」

「野暮と化ものは、箱根から此方には居ませんさうですね。」　と、まじりと言ふ。

「な、其かはり、何うかすると、其の別嬪のやうなのが居るのよ。で、與四公何だと言つたよ。」

「夫人がね、　（與四公、先刻の、あの　ーー

「わアかア」　最う一度私の名を呼んで御覽。）

と言つたんです。えへゝ、更まつちや出ませんや。
（よ。）　催促をされると尚ほ不可ませんや。そのかはり、ほツほう、遣りましたぜ、えゝ、木兎が家の奥で鳴いたんです、木戸の處に眼玉がびか／／。」

「大袈裟だい。」

「ですが、然う思へるほど、格子も木戸も暗いんで、まだ電燈を點けちやありません。木兎が鳴くと夫人が、　（あら、お婿さん一人ぽつち、）　てツて、威勢よく羽目板を傳ふんですが、それが、あの手指りで、　・・・・・　男の人が手を曳くのを、可い／／ツて言ひましたつけ。掻卷着たのが悄乎するほど、容子が滅入つて、お爺さん、」

「えゝ。」

「錦木さん盲目ですよ。」　と、目をまるくして言つたのである。ーー。」

「馬鹿を言へ。」

「否、晝間は何ともないんです。日が暮れると、」と言も終らず、。爺様は胸を拍つて、

「南無三寶、雀盲だな、雀盲かい、あの人が、おや／＼、」

と、吻と溜息。急に、ぶる／＼と頭を振つて、

「あゝ、雀盲は治るよ、雀盲は治るよ。」

「治るんですつて、　ーー　ですから、男の人も酒を飲みながら言つたんです。丁と醫師へ掛らなくつちや不可いッて　ーー　夫人がね、お爺さん、（然うすると、長い間何でも醫師の言ふ事を肯いて、あれをしちや成らない、恁うしてはよくない、何一つ自分勝手な我儘が出來ないから可厭だ。また言ふことを守らなけりや療治をしても役に立たなからうし、病氣を治すためにだつて、人の言ふ通りにや成りたくない。其のくらゐなら宵から寢て居ると思へぼ濟む。）　ーー　然う云ふんです。

そして、御酒は自分で飲みますけれども、天麩羅なんざ男の膝に凭掛つて、仰向いて養つて貰つて、

あゝ、旨しいつて、」

と、うつかりしたやうに口の端を撫でる、と爺様は、への字の皺に唇を引結んで、

「あゝ、言ふ事、爲す事、魔ものゝ所爲だ。やい、與四、決して眞人間の仕業と思ふな。で、誰にも饒舌るめえぜ。しかし氣の毒だ。いづれ親がねえんだらう。な、與四、人間として附合つちやよくねえが・手前は當分、半分木兎の乘憑つてる身體だから、其の木兎の羽でよ。夜分なんざ又飛歩行の使えや、また用ぐれえは足して遣んねえ。　ーー　海は廣いや、鯨も棲めば人魚も居る、半分人間の別嬪だけに、あいつの裸體は寒さうだ。」

と手酌の、ちろり。で、時雨に寢々衣の襟を合はす、　ーー　臺所では、かくやの音。

九

「眞個の事かね、全體、槇原家の御沙汰とあつて、右の別嬪に店立を啖はせたと云ふのは。何うでがすえ、越長さん。」

越中屋長助、（錦木の宿から、時雨の夕、河童が徳利を提げて行つた、越長と云ふ酒屋。）は同番地の差配をして居る。　ーー　こゝへ、花政入道が一晩夜食過ぎの、中位を機嫌で、杖は支かぬが、後手を組んで、のこ／＼もの、やつとこなと、頭で燕の巣の下を潜つて入つた、服装は印半纏でも、表店の大隠居。

めくら縞の鯉口、淺黄木綿三幅の前掛で、目が、くしや／＼、燐寸を擦つても嚏の出さうな顔して、稼ぐ一方、律義、千萬な、越中屋の長助。若いもの小僧、五六人使ひながら、酒、醤油の量計の手加減、へい、入らつしやい、と自分で飛出す氣構で、帳場格子へ坐りもやらず、夜だと云ふのに押立尻して客を眼張つて居たのが、慌てゝ飛上つて、帳場へ、先

づ、と請ずると、花政が又上りはしないで、樽を引いた矢大臣、腰を極めると折込んだ胴が据つて、洞ヶ峠の床几に掛つた、筒井順慶、天が下の日和を見る面構。唯一つばく／＼の唇を嘗めた處は、自分で利酒の下備へ、少くとも四割一樽と思ふと、然うでない。

言はれた事は唐突だつたが、返事に差支へる事ではなかつた。低い聲の、爽ならぬもの言ひで、

「えゝ、其の店だて、と申すと穩でございませんがな、御邸の方に、少々餘儀ない事情がございますので、」

「いづれさ、事情がなくては成らねえ、店賃の滯りなんぞでがせう。」　と云ふ、爺さんの頸には財布の紐が緩やかに掛つて居た。

「尤も、店賃の處もございます、が、それは、お邸様で一時お立てかへに成つても可、其上に、　引越料と云ふやうなものも相當に出して遣らう、と恁

うまで仰有るんでございましてな、へい。」

「確か、此の邊の家作は、こりや槇原のでは無いのでがしたね、　……　越長さんは御差配だ。」

「へい、届きませんが、差配で。家作は持主が違ひます、が、地所はすべて御邸様のもの。と申したやうな譯で。」

「然れば、地主にしろ、別な家作ぬしの方へ、借家人の店賃を立替へて、引越料まで出さうと言ふ、これがそれ、他のお大名なら、陽氣の加減で、道樂になさるめえものでもねえがね。町内に火事がありや、消防夫が樋を伏せて一煽りお迎へ申さうと云ふ邸でがさ、越長さんの前だがね。それが店賃、引越料とまで氣張つたのは、何う云ふもんでがすえ。」

「其がね、御隠居さん、容易なりません事情なので、」

「はてな。」

「御邸様は唯今の御住居は、彼は確か一昨年あたり御新築に成りましたので、根岸には舊御殿、今では御控邸でございますが、其の、貴老、御殿から御前と御一所に、否もし、御前同様にお引移りに成りました、御先祖代々〳〵、中興の城の御天守にお据申上げたと云ふ、お人形様が御一體。」

と謹んで、まじりと言ゝふ。と隱居が引掴みさうに大な握拳を前へ突出し、肱を張つて、

「はあ、木偶が一個だ。」

越中屋長助は苦い顔して、

「否もし、槇原様御代々〳〵の靈魂とも申すほどな、大切な御人形で、白菊様と申します。」

「はゝあ、えゝ白菊　……　名告を上げた處では、こりや、雌だね。」

「飛でもない、へゝゝ、御隱居、御串戲ばかり。雌雄などと、御勿體も無い事で。　ー　えゝ、と申しますのが、至つての御秘密でございましてな。

御邸の御家來衆はじめ、なか／＼御姿は拜まれません。從つて、女體男體とも存じたものはないのださうで、と申しますのが、御邸では御前樣、若殿樣、其の他、家令家扶御男子の方は、其のお人形樣を唯今お話しいたしましたつけ、「雲井樣。」と申されますが、奥方樣、姫樣、お小間使方、すべてお女中は、「白菊樣。白菊樣。」とおつしやる掟で、同じ御人形に、申し方が兩樣でございますくらゐで、御本體は分りません。何しろ、豊臣、徳川家、足利、そんなものではございません。源平藤橘と申す、あの、藤原時代からの御姿だと風説をします、御奥の別殿、お人拂ひで御据ゑ申してありますさうで。

但、御前立、御齊眉の若衆人形、此は人も皆知つてゞございます。それ以ても、お出入ぐらゐの町人には拜めませんが、御客、御家衆、誰方も御承知で。えゝ、「霧之助殿」と申す、前髪立の、眉のきりゝとした、目の清しやかな美しい、それは凛々しい。黒羽二重の紋着萌黄瀧縞の袴で、脇差、と申すのが、此が趣の變りました事は、黄金づくりの小太

刀ださうでございましてな。」
入道、上胡坐の片脛を落して、腕を拱いて、
「はて　……　此奴は些と價値さうだね。」
「御勿體も無いことばかり、へゝ。此の御若衆とてもでございます。お小間使如きが手も觸る次第には相成りません、夏冬、時々のお召替も、御本尊同様に、御邸の、何でも總領のお姫様がお手づから、召せ脱がせをおさせ申す定ださうで、御代々。へい、尤も姫様が、おあんなさらなければ、奥方様のおかゝり、此は申すまでもございません。
で、此がためには、海を越して、貴方様、北海道の王、と申す、大鉱鑛山の持ぬしへ御縁附でおいでなさいます、御姫様が雛、菊の、節句ごとには、故と遙々お立戻りで以て、お装束をお更めに成りますくらゐ。其の砌は、お姫様、さげ髪白無垢、緋のお下襲ね、と云ふ清らかなお美しい姿で、別室に矢張り、お人拂ひの上ださうでございます。　ー　夏冬のお召替、御代々一度でも此が等閑に成りませうなら、忽ち、　……　えゝ、「白菊様。」　御

機嫌が損じて、御邸には、火難、盗難、劍難、水難、）　なか／／病煩ひ處では納まりが附きませぬさうで、事も容易なりませんやうな次第で、　・・・・　既に先頃、此の九月にも、姫様が右のお立戻りで、其のお儀式が相濟みましたばかりなのでございましてな。」

花政入道、天井むきに目を暝つて、

「入費は　ー　婿持でがすね。」　「はあ、」

と、唐突で些と解し兼る。

「否さ、槇原の事だ。総領娘が北海道から往復の入費などはさ、孰れ婿の方で背負でがせうね。」

「はあ、其邊は何とも手前心得ませぬが、何しろ、事も容易なりませぬ次第で、尤も御縁組以前から、此の儀は、堅い御契約と承つて居りますよ、へい。」

「先祖の靈魂だと言ふんだ。大名の先祖はいづれ木偶ではがあせんよ　・・・・・　家の掟だ、それだけ

は感心だね。尤もさ、火難、盗難、水難、劍難で怯かさねえぢや、白無垢を引いても疊が摺れるなどゝ言ひ兼ねめえがね、其は可うがさ。いや、お話は成程と思ふがね、越長さん。それが何だつて又別嬪の店だてにかゝり合があるんでがすえ。」

「其處でございますよ、御隱居、御総領の姫様が御婚禮の砌り、然うした御約束がございますと　同然に、御邸様で、此の地所をお貸下げに成ります時、借ぬしへ御内意には、建てた家作の中へは、一人缺たりとも盲人を住せてくれるなでございます。」

「盲目を　……　はてな、」

と前屈みに、腕組のまゝ頭を乘出し、

「一人たりとも　……　尤も、按摩の缺と言ふのは、つひぞ無えがね、はゝはゝゝ。」

越長も苦笑した。

「へゝゝ、と申すうちにも、男の按摩は構ひませんので、暫女が不可ません、其の白菊様が昔から金輪際、女の盲目をお嫌ひ遊ばすのださうでございま

してな。」

「大層な我儘だね、と云ふが、色身な瞽女どのは私だつてあやまりまさ。朝顔日記宿屋の段さね、大井川の縁で、天を仰いでハツタと來る、と牡蠣の剥身をどろりだよ、お前さん、聞いても恐れる。が、さて、何うしたと言ふんでがす。」

「否、御邸様ではね。御隠居、何う云ふものでございますかね、引續き變な、御氣色の惡い事だらけ。彼處にトオマスと云ふ、難有い事には、内閣の大臣方から下置かれました處の、其　・・・・・」

「知つてまさ、南瓜、うんや、南瓜ぢやねえ南瓜だ、頓馬だね、居まはりで脊高のつぽの魚屋の定と對な奴だね。」

店の若衆が哄と笑つた。

越中屋の長助くしや／＼の目を尚ほ皺めて、奴等を睨んで、

「御隠居、彼岸の中日の夜中、一時頃で、御門を敲いた電信配達が、キヤツと言つて打倒れましたので、門番の爺やが、吃驚して出て見ますと言ふと、右の大黒犬が、土塀の屋根へ乗つかつて、流星を見ながら欠伸をして居ましたさうで。犬が其の屋根に上りますと家の礎がぐらつくと申すくらゐ、よくない兆と言ふ中に、鼠が井戸へ落ちて釣瓶で上りますし、生りがゝりの柿が、ぼた／＼と蔕を離れて落ちます。時ならぬに蛞蝓が湧いて御床の間の柱を這ふ。御臺所の屋根へ草が生えて、大きな蛾が飛んだり。お求めの魚の目玉が抜けて居て、お玄關の廂で烏が啼いたり。それはそれは可厭な可忌い事ばかり。前例も度々の事、御邸の御記録にも殘つて居ります儀で、皆是れ雲井様御不興のお祟りでございますが、何う檢べても、お上通り、御家來衆に、手ぬかり、越度と云ふが、嘗てございません。もしや、と八方を捜しますと、何と御—隠居。地面内にも、何と、直き其の井戸端の枇杷の樹の蔭に、錦木でございますな、右の、奥さんでございますか、お嬢さんか、お師匠さん、姉さん何とも得體の知れない、貴老のおつしやる別嬪が住んで居ります。聞質しますると、

不思議に、其の、彼岸の入頃から煩ひついたとか申す事で、」

扨こそ知んぬ、和歌子が雑司ケ谷の途中から、河童に背負はせて歸つた曼珠沙華を、人の問ふのに答へて、冥途を照らす松明だ、と言つた、あはれ、其の心の裡。

十

頸へ財布を掛けて、兀頭を押して來たほどだから花政が納まらない。

「越長さん、趣意は解めたがね、お言の中でがすが、雀盲はこれ盲目とは違ふよ。たとひ瞽女にもしろ、其の廉を以て店立を食はせるとは何事でがすえ。然も直接もちの貸家ぢやねえ、言はゞ鄰同士、背中合せの松飾ぢやねえ、薪雑棒と錦木だ。」

と、唇をべろんと舐めて、

「盲目が、店立に成るやうぢや、唖だと遠島だ。聾は百叩きで江戸お構。これ、躄や、手棒は死罪だね。串戯ぢやねえ。木兎、梟は晝間磔、鳶烏は夜中獄門だ。途方もねえ。人形が祟るのは筋が違ふね、別嬪の所爲ぢやがあせん。私が思ふにや、あの邸だ。食物が悪いためだ。白菊、何だツけ、其の霧之助人形を飼置くのに、稗や粟ばかりなんだらう。」

若衆の中で、誰やらヒヤ／／と言ふ。　……

又哄と笑つたのである。

花政入道嵩に掛つて、

「御託はねえのだ。其の人形殿も、祟るなら、悪く遠廻しに手前の邸を突かねえで、いきなり別嬪の寝床へでも、湯の中へでも踏込めさ。直か祟りに祟るが可し、槇原の方も又無法千萬な、何のかゝり合もねえ裏鄰家を越させようなぞと血迷はねえで、さつさと自分の方で引越して行くが可うがせう　……

：　ねえ、先づ、ものゝ道理が。　ーー　其處で何かい、内の木兎に聞いたが、お前さん、其の店だての御上使にお出向きなすつたか、まじ／／と。」

「えゝ、まじ／／出向きますと、へゝゝ。」

今の　（まじ／／）　と味方の若衆の裏切に、人の好い長助も、聊か肝を煮したらしい、が、氣の弱い親仁だから切つて掛るのも這身で行く。　……

「驚いた事には、床の間正面の壁に、花籠と云ふ處を、木兎籠は變なわけで。おまけに其の何時細工をした事やら、處々、白粉やけなどのございますな、緋縮緬の、外套やうのものを羽織らせてございます、頭にもな、耳を出して顱巻を。右の木兎が貴老、途方もない。」

と言つたのは、此の頃、花政の與四郎が、同じく、和歌子の仕着と稱する、右同斷の切を外套めかして翩翻として町から辻を自轉車で駈廻つて、時々三越あたりの使小僧の萌黄な奴と擦違つて、目を剥けば、舌を出す。鳥だか獣だか奇怪至極で、風立つた日なぞは、物騒にも炎の飛行するが如き亂行を、敢て隱居の禁抑しないのを諷したのである。

驚くものか、花政けろりとして、

「ちくりと來たね、内の與四郎も右ポチ／＼だと言ふんでがせう、あれは廣告でがさ、花屋政右衞門、資本入らずで別嬪の母衣を使ふ、井伊の赤備と云ふ軍略さね、ーー　惡く見ると、しかし、」

と、聊か聲を密めて、

「別嬪の其の、穏ならぬ此羅にも成るがね。花に遊女草があれば、草にも三味線草でさ。大海は廣いや、鯨も住めば、人魚も居る。腰から下は人間に非ずでも、時雨は裸體は寒からうと　ーー　こゝが人情ぢやがあせんかい。別して雀盲とへば尚ほ不便だ、杖を持つなら杖の尖へ菊でも結へて遣りてえや。」

若衆達を〓して、

「何は、河童が酒を買ひに來るとね、來ますかい。」

「えゝ、今しがたも來ましたよ。」

また一人が、

「御隱居さんと擦違ひなくらゐなもんでした。」

「はゝあ、成ほど郵便箱のすぐ手前で、をかしな犬が、ちん／＼をして歩行くと思つたが、彼奴かね、私あ目が惡いよ。」

と瞼を擦つて、

「いづれも親のねえ所爲だ。　……　河童を飼ふのも、木兎に緋の外套を被せるのも、可かね。我

儘不埒とも言へば言ふのだが、これ、御互、銘々の内に、玩弄の般若が無くもなし、狸の掛地を掛けずとも限らねえ。悟ればそれまでゝがさ、はて、大海は廣いや、般若も住めば狸も居る。」

「海に狸御隠居様違ひました。」　と小僧が黄色な聲を出す。

「ほう、違つたか、いや、年紀にはかなはねえ、大分饒舌つた。」

花政は口を撫でゝ、

「處で要談だがね、何は措いて雑と先づ、店立ての御使者に、お前さんが出向いたわけだ。」

「決して其の、何でございますよ、差配の權柄づくで何う恁うと云ふのではございませんので、近藤友英殿、えゝ、御邸のな、昔なら千石取と申す御家老、唯今はお執事でございますな、其の方がお出向きに成りまして、手前はな、唯もう差配と云ふので、顔だけを、それとても恭々しく子爵様のお名札の据りました、白木の臺の御進物を持ちまして、」

爺様は、しやつきりと肩を張つて、膝に手を掛け、
「紅白の水引、大奉書、中味は半紙九枚でがすね。」
「否、角の荒物屋でお求めに成りまして、手前、存じて居ります、……上つ方では恁う云ふ時のお儀式と見えまして、鹿角菜が七枚。」
「鹿角菜が七枚。」と忘れもしない、貴夫人が牡丹の値に驚いた時のやうな異聲を放つて、
「あゝ、天道、是か非かい。」
若衆が三たび哄と笑つて、今度は拍手した奴がある。
「九は病、五七の雨だ、が鹿角菜だけに天氣でがせう。」
「然やうでございますかな。」
とまじりとして居る。……町内に華族があれば、自分お膝許の町人と云ふ心得、成程此の了簡なればこそ樽拾ひから此までに仕上げた、以て龜鑑

とすべきである。

花政から／＼と笑つて、

「はゝゝゝ、や、話は早い、可い、處で別嬪の挨拶は何う云ふのだね。」

和歌子は意地では引越さない、が、江戸に下町がないやうで口惜いから、或は家を明けても可い、けれども氣に入つた先の見つかるまで、と云ふか、存じのほか穏かな、併し取留りのない返事をしたのである　……　と云ふ　ー

「理屈は除けてだ、ね、越長さん、生れは御邸の在方にもせい、最う此れ十何年、お祭禮の御神酒所ぢや顔を並べる連中だ。先方に白菊、霧之助がついて居りや、此方には神功皇后様、武内の山車がついて、獅子が背後に眼張つてござる。可いかね、寄合で將棊をさせば、口惜いけれど、香車一枚お前さんの方が強いや、叶はねえ。」

「へゝゝ。」　と、嬉しさうに、若衆は睨廻はして莞爾する。

「此處だ、越長さん、ね、其の強いのが、大名華族の味方をして、風儀が惡いが、我儘が、細りした女一人、然も雀盲のあはれなのを居所に迷はせると云つて　……　成角で歩を取つて頂く法があるものか、邸は邸次第として、兎に角、御差配は、すつぱりと手を引きなせえ。

店のものや、嫁、娘の手前、表向とは行かねえが、……　店賃なんざ心得て話をつけよう。　……　無盡に當つて、内證の金子が、切餅五ツ。霜月の半ばと云ふのに、此の景氣は見せてえやうだ。」

と三徳の如き手つきで、がツしりと胸を壓へた。

一も二もない、越中屋の長助、畏つてお辭儀をする。　……　綺麗に酒を誂へた。

「難有う存じ　……」

「お歸んなさ　ーー」　と、口々なり。　「はい、お喧しう、どつこいな。」

歸りがけに、さて、此の露地だ。

「あゝ、突當りに居るのが、雀盲だと思へば夜も

餘計に眞暗だな。　ーー　喃。若え時に、俺も何と、總領娘を品川の苦界に沈めた。苦勞爲死に死んだ時、何を佛に拗ねたやら、墓には曼珠沙華ばかり手向けてくれ、と遺言したツけ、手前は目蓮のいろでも持つて惚氣だかも知らねえが、親は骨身に應へるわい。山の手一番の花政が、娘が遺言のすきな花を思ふやうに見せられねえのも、報と因果だ。」

爺様は獨りほろりとした。

「何か、此處のも、秋の彼岸に、家中、曼珠沙華を活けたとな、　ーー　暗いにつけて、狐火のやうに、ちら／＼と、あゝ、目前にちらつく。其ン中に、白い衣服が、娘の幽靈そつくりだ。」

丼の輪數珠を手首へ、

「南無大師遍照金剛。　ーー　若死するなよ、鶴亀。」

とて、二ツばかり胸を叩いて、

「長いきをさつせえよ。やれ／＼、子ゆゑの暗夜

には、與一兵衞だ。懷中に無盡の金、あゝ、我ながら意氣地はねえ。しや、別嬪を露地において、水洟とは何事だい。南無大師遍照金剛。」

禿頭へ、すぽりと頬被り、寒さうに、ひよこ／＼と行掛つたのは辻である。腰を伸すと角邸の磨いた甍が星に冴えて、夜目には遠く城の如し。

「槇原の邸だぜ、はてな、地代を慾張つて庭は狹し、然して樹林の圍も見えぬ。根岸の御殿は知らねえが、新築だと云ふ見掛け普請が、奥深く棟が高え。廻はした土塀も砦の構へだ。……霜が他家並より早いのか、鎧つたやうに棟瓦が暗に光る、ーー大名の威光かな。……奥と言へば冬牡丹に反つた奴ーー はて、不思議だぜ。別室に秘めた、雲井、白菊樣とか、霧之助殿ーー と言つたな。代々／＼総領の姫樣が、緋縮緬の下襲ね、白無垢の下髪……解せたわ、其所爲だ。」

途端である。しゆつと地を裂く音がした、黒い奴が道を切る、と、わツと叫んで、追はれて遁げたは、

與四郎小僧。呀、頭から鹽かと思へば、郵便箱の赤い上へ、ひよい、と乘つた。はずみに〓と煽らせたは緋鹿子のお仕被外套、印度の石地藏と云ふ體で、日にやけた手を拍いて、

「此處までおいで、此處までおいで。」

腹なりに、のし掛つて、鼻嵐を吹きながら、前脚をもが／＼と暗を引搔くのは勿論トオマス。早寢た、萬年堂の溝板を、ひた／＼ひた／＼と赤面の侏儒、横歩行して出來たる。

十一

「何うも何とも言へませんね、滑々として柔かくつて、堪らなく可いですな、不思議な手觸りですよ。」

「衣觸りだとお言ひ。」

と言つた。和歌子は、六疊の暗の中に、燈も置かず、卓子臺に凭掛つて、按摩に肩を揉ませながら、

「人聞きが惡い、身にでも觸つて居るやうぢやないか。」

「えへゝ、御新姐さん　……　えゝ、お孃さん、貴女のお身體あ、僕はね、此の通りだと思ふですよ、羽二重と云ふのですかね。」

然矣白羽二重、猶太の女の寢衣に似て、そして袖の長いのである。寒いから、下に襲ねたのは、着古しだが、色の白さに灰汁を洗つて、雪に、もみぢの散殘る緋鹿子の長襦袢、兩袖を引切つたのは、一つは與四郎の母衣に成り、一つは木兎の外套に成つて、

現に床の間の壁の正面に、眞向の、雙の眼が輝く。時に、さら／＼さら／＼と鳥には似ない羽の音は、翼が外套を煽るのである。

和歌子は、あの黒地に菊と水仙の友染の掻卷の、裏の朱鷺を、腰に、辷らして膝に敷いた。

按摩は紺絣の衣服に同じ羽織、白い紐を大きく結んだ、色の生白い、十六七の、頭の先の尖つた小僧で、戸外を流したのを呼込んだものである。

聲がはりのした奴が、舐めるが如き辨舌で、

「隨分何です、僕はね、澤山のです　ーー　數限りなくと言ひたいですね、女を何です、手に掛けましたけれどもね。」

「稼業が繁昌で結構さ。」

「えへゝ、稼業やないです、別の方面ですよ。ひゝゝ、勿論、あれです、稼業だつてね、遣つても遣らなくつても、此で經濟を奈う恁うと云ふんぢやありませんや、事實。　……　ですからして、此

でね、療治に呼ばれて、客が男だと斷つ了ひまさ、僕の療治は男には利きやしねえ。」　と唐ぬけに禰藏なものいひ。

「客が怒るだらうね。」　と、煙草を喫まうとして頸を垂れつゝ、揉む手に委せた肩つきの品のよさ。

火鉢の火の影、按摩は、絲の如く盲ひた眦を、眉ごと下げて、ニヤリとして、

「でも、男の客にや、又それだけの用があるんです、利かねえたツて串戲だと思ふから、確乎遣れなんて言やあがる。そんなのは背中へ廻つて、へへのゝもへいじを指の尖でのたくらして居りや可いんで。其のうちに、女の話をして聞かせて遣るんだ。僕の知つてる　ー　數澤山だし、種類は多いし、大概の男が、それから／／ツて、僕の指の尖で、獨樂見たやうに、ぐる／／と身體を廻さあ。僕の經歷を話すとだね、唐人髷から、結綿ね、文金、廂髪、女優髷、大一番の圓髷、何でもだ、其の中からね、孰でも好さゝうなのを撰取つて、また世話をして遣るで

すよ、施しの氣だ、自分の持ものだつて何だつて、功徳に成るし、此方は珍しくもない、ざらなんだから。施した上で禮は貰へる　……　家からも祝儀は出るし　……　だから小遣はあり餘つて居るんだから、しろものに依つちや、此方からも注込むのがある。あゝ、手を動かすと懷中が突いて不可え。」

と、紐をはづして頸から取つた財布をぐる／／と卷いて、重さうに、亂れた掻卷の裾へ手捜りで置いて、其の上へ、めりやすの食み出した膝を乘せた。そして、首を出して、ひたりと、白衣の背に胸をつけて覆はれかゝつて、煙草の煙に鼻を寄せるやうにして、フンと嗅いで、

「さあ、横にお成んなさい。」

唯、衣擦の音がして、言はるゝまゝに、自由に成るらしく横に成つて、うしろ向きに掻卷をすつと裾へ、……　引いて取られた壓に成つた按摩は、疊へ落ちて、も一つ財布の音がした。

「ひひゝゝ、御新姐さん、お孃　……　姉さん

が可いや、色氣があつて、年紀は幾歳ですえ、」

「……」

「えひゝゝ、當てゝ見ようか。そりや場數を歴てますからね、特に女にはですな。うまれ月まで違へねえくらゐなもんだ。恁うさすつて見た、脊、恰好でね。内にだつて、髪の毛から、足のおや指の尖まで、僕の手の中に轉がつてる女の九人と八人は居るんだから。　ーー　だがね、今も言つた通りだよ、姉さんのやうな、ひゝゝ、衣觸りかい、ひゝゝ、こんなのは始めてだから、違つたら、御勘辨。蜜豆を三杯奢らい。　……　四かね、五かね。堪らねえ處だい。」

「按摩。」

「……」

「ほツほう。」　と、木兎が床の間で。火鉢のあかりは谿間の一つ家、深山幽な寂しい聲。

「按摩。」

「え、今のは。」

「木兎が啼くんだよ。　ーー　山奥かも知れないよ、谷底だか、塚穴だか、宮だか、社だか分らないよ　ーー　按摩。」

「按摩は惡だね、君、君だから僕は敢て怒りやしないが、若師匠、小さな先生と言ってくれ給へ。これでもね中學の一年は學つたんだ。制帽でね、靴で、其ン時にやポンと草場へ轉がりましたよ、海老茶を穿いた起上り小法師だ。ひゝゝ、たわいのないもんですぜ。」

「一寸、」

「何だね。」

「此處を何處だと思ふんだよ。」

「霞町の錦木さ、憚りながら知ってるよ。麻布ばかりぢやありませんや、淺草の姉さんだって知ってるよ。」

「淺草の姉さんだって？」

「知ってるでせう、公園ぢや　……　緋袱紗のお染と云ってね、芝居のお染をお茶の湯仕立だ。抱

への八人も置いて居る大籬でございますのさ。僕は眞個の姉弟だけれど、柄がお染に肖ると云つてね、久松々々久松さあん、編上の靴で學校通ひが、ひゝゝ、女が思ひで、風眼で見えなく成つた。が、其のかはり心は明かに光つてら。姉さんの鼻筋の通つてる、髪の艶まで、よく見える。　ー一雀盲だつて？　可哀相だね、寂い顔をしてますねえ。」

「木兎が鳴く山家だもの、按摩。」

「まだ、言つてら。怒るぜ、僕は。」

「勝手におし。」

「可いかい、ひゝゝ、ひゝゝ、然う言はれると、君だけに怒れない。さあ、此方を向いておくんなさい。」

黒髪の、黒髪の、はらりと枕にかゝる音、留南奇の香が颯と散る、木兎の聲きこゆれば、桂が薫る氣勢である。

久松の手が、ト羽二重の袖に淀んだ。

「うまからう、姉さん、稼業は稼業で、療治の方も本筋さ。」

「すぢだか、はんぺんだか知らないが、淺草から、こんな處まで、大變なあぶれぢやないか。」

「串戲言つてら。そんな、そんな金錢に不自由して稼ぐやうな御人體か、柄を見て貰えてえ。雀盲だから、夜で見えまい。都合で晝間出直すからね。

ーー　此の半年ばかし、淺草も鼻についたから、十番に居る二番目の姉の許へ來てるんだ。失張りね、四五人居るがね、土地だけに場違だぜ。だが、鯛鮪も食ひ飽きた口にや、秋刀魚のあとを丸八の黄袋で齒を磨くのも惡くねえよ　・・・・・」

「お前、口ほどにもないぢや無いか、可哀相に奉公人を苛めるなんぞ、」

「馬鹿な事を、」

膝を、ばた／＼と疊の地たゞら。

「御人體が見せたいや。一寸でも客が居ねえと、彼方からも久松さん、此方からも久松さん、身體が續かねえくらゐなもんだ。淺草も、十番も、其の味

に變りはねえよ。空腹な野郎も野郎だけれどね、女と云ふものは、また何うしてあゝだらう。雨のしよぼ／＼降る、此の時雨時なんぞ、夜中、十二時過ぎと云ふのにだね、材木屋の辻や、石屋の角に、濡れしよびれて立つてる婦を見ると、途惑ひをした貴夫人や、ひとりものゝ救世軍なんか、悲惨だの殘酷だの、何かね、社會問題だなんと言ふだらうがね、へン、主人は頻つて早く寢かせようとするけれど、奉公人各自が男がなくつちや寂いんだよ。　……

岡釣が川端で日を暮すのも同じさ。どんな雑魚が釣れるだらう、間違つて龍宮から勘當された鯉でも引掛りやあしないかつて腹ですぜ。樂なものだとね。汁粉が三杯、蕎麥が二杯か。おでんの立食をすればつて、鮒も鯰も遁がしはしません。それでも溢れると、あけ方の三時四時でも、久松さん後生だと來らー　續きませんとも、實際。何うして婦はあゝだらう、商賣人ばかりぢやないんですぜ。呼込まれた療治の對手が、何だつて、御覽じろ、一晩旦那が留守の處が、半日主人人さへ居なけりや、へん。」

和歌子の肩が靜に搖れて、

「按摩のかなしさ、前世の果報が拙くつて、盲人に成つたくらゐだもの。然う云ふのはね、百姓や、田舎の女にばかり出會すからだ。おさんどんでも可いからね、お前、信心をして、一度江戸兒と思ふ女に、口だけも利いて御覽。」

「へん、では何かい、姉さんは。」

「あゝ、お姫様は柳橋だよ。當、霞町は御別荘さ。」

「燈も點かねえ御別荘だ。僕が、今夜來たてにも、魚屋かね、牛乳屋かね、大分催促が來ましたぜ。眞暗だから歸つたがね。……何も、負惜みを言ふにや當りません、男氣は無し、寒さうだ。こんな暖るものは何うですな。」

と件の財布を片手で摺らして、唯掴んだが、和歌子の懷中へ紐ぐるみ突込むと、はずみに、辷つた白羽二重、其まゝ、袖を取つて、ぐいと引く。衣紋が飜つて、唇と、煙草と、齊しく颯と紅い。

「ほゝ　ゝ、ふゝ　ゝ　ゝ　ゝ。」　笑ふ花も紅である。

木兎が鳴いたと思へ、あの爛々たる眼を切つて、閃然と白く輝く稻妻。和歌子の頬に光を流して、寢着の咽喉の氷の短刀、按摩が右に逆手である。

「阿魔、生意氣だい。」

語氣も血相も黒く代つて、

「冷りとしたらう、氷ぢやねえ、肝にこてえて口も利けめえ。さあ、きやつとでも言つて見ろ。長屋中が飛出す前に、一抉りだ。これ、俺ア按摩だ、盲目だぞ。汝の懷中にや何がある、俺の財布だ。やい、大岡越前のお白洲でも此の言わけは立派に立つのだ。

……　ひゝゝ、」

と笑つた、此の小按摩は、あの手で成らねば、此を用ゐる、久松市とて彼等に知られた女たらしの低能兒であつた。

寐よと云ふ麻布聯隊の喇叭が留む。

「ふゝん。」　とばかりで、寂然として、掻卷の袖も冷い。

吃驚して氣絶したのであらう、と思つた。久松市が撫でゝ見るつもりの手に應へたのは、短刀に、ものゝ觸つたので。呀、威の切れもの、と引かうとすると、むかうへ引くか動かない。怪訝に思つて、聊か忙いたらしく片手を胸へ掛けて、ぐい、と引起すと、眞綿より柔かに、なよ／＼と成つて、起きしなに、トンと肩で凭れかゝると、しかしながら戀の重荷に、久松市は背後でくしやんと腰を支いた。が、手で探つて驚いた。指が觸れてビクリとした。和歌子の手が、其の短刀の刃を引掴んで居たのである。

「馬、馬、馬鹿、指が落ちるぜえ。」　と、慌てゝ言ふ。

爾時、片手をが火箸に掛けて、火をあらけた、顔の色は、神々しいまで白く透つて、

「ふゝん。」　と片靨した、それさへ白い。

「えゝ、狂人。」

「小僧、手前たちの持つ威しの小道具は、お極り

で刃(は)びきなんだ。　ーー　戸惑(とまど)ひしねえで、二十五座(ざ)の座頭(ざとう)に出(で)ねえな。」

十二

面疱の引込んだ惡黨だと、最う此で見切りを着けたであらう。が、二才だけに、盲目だけに、今ので張合もなく短刀を落しながら、もう一息。

「女の癖によ、汝！」

「何をする。」

「きやツ。」　ポキリと音して、小袖の霞を越した手は、指を二本、逆に取られたのが、節を離れて挫折れたのであつた。痛手に堪へず、叫ぶとゝもに久松市は、仰向けに轉がつた。

「あ、痛々々々々。」

足を悶え、胴を揉み、ばた／＼と煽つたのが、どしん、どしんと蹴はじめた。

「畜生、あ痛々々々々。　ーー　畜生。」

が、心も眩んで、足に掛けようとする女の居所を捜り得ないで、徒らに空を蹴て居るうち、和歌子は、輕く一つ手を拂つたなり、火鉢に掌を翳して居たつ

け。按摩が焦り、悶えて、痛さの發奮に、刎起きると、猫がする如く疊を毟つて、捜り手に掴み着かうとするので、

「ちよツ」

舌打して、すツと立つた。立ちざまに、〓と電燈を。忽ち明るく成つたので、然らぬだに巓倒し、惱亂した久松市は、居處も立處も方角を失つて、徒らに足で、たゞらを踏んで、片手毟りに疊の上を摺廻る。

「畜生、畜生、食殺す。」

和歌子は床わきの、波の剥げた、千鳥の亂れた襖に身を寄せ、俯向いて凝と窺ふ、　……　半殺しに手に掛けた、蛇の頭と、蜥蜴の尻尾の、裾近く、ぴち／＼刎廻るのは、餘り心持の可いものではないかして、和歌子は始めて眉を顰めた。

唯不意な電燈と此の騒動に、籠の木兎、宛然着た蓑の燃ゆるが如く、紅い外套を煽つてひよん／＼飛

ぶ。　ーー　傍の壁に寄掛けた、白羽の矢が七筋と一張の弓がある。破魔弓、半弓の類で此の怪鳥を威服し、かの按摩を抑制すべき武器ではない。手遊びの揚弓で、和歌子が畫の徒然を慰む　……　近頃は河童の矢取りが出來たので、一層壯に杉垣の的を射る　……　其の的は敢て仔細ないが、ともすると縁の日向に山茶花の絞が咲いた片膝立ての姿にして、矢を空ぎまに、木戸の絲瓜を狙つて、よツ曳いて、音がポンと中る。又鍛錬なものだが、何となく皮肉らしく、近所の男どもが此には弱つた。

「うー、うーむ、」　ーー　按摩は、紺絣の黒い腹を仰向けにして、甲蟲の裏返つた如く、餘程な疼痛に手足を縮めて、引息に聲が途絶える。

和歌子は襖に白衣で立つて、恁う窺ひながら、奴が目を眩したらしいのを試すのに、あの財布を握つて、ドンと投げたのが、土性骨に當つたので、忽ちも一ツ激しく呻吟ると、彈き出されたやうにむつくと起きて、最後の復讐、で、どし／／どん、どたん、ぱたん。

門、木戸、水口の戸の開く響、合壁の人々出合ふ途端に、露地を風の如く吹込むものあり。

「與四公かい。」

「奥さん、　ーー　えゝ何だ、此の、キチ／＼ばつた。」

「畜生、畜生、畜生。」

「與四公、つまみ出しておくれ、其の蟲を。」

和歌子は、それでも雀盲のしをらしさに、掻探る手つきをして、

「刃ものを持つてるだらう。切れはしないがね、突かれると危いよ、怪我をおしでない。」

「へい、何だ、生意氣な蝋燭按摩、花政ン許の與四郎を知らねえか。」

暴れ廻る手を壓へて、襟首を取ると、ずる／＼と引摺出す。

「畜生、交番へ告訴をして遣る、縛られるな、女郎、覺えて居れ。」

「一昨日來い。」

で、杖を取つて抛出すと、露地を、ひよろついて行く久松市の出鼻を切つた、挾まる杖に脛を取られて、前のめりに、つんのめつて眞うつむけ。

「交番へ告訴をして遣る、交番へ告訴をして遣る。ーー　縛らせて遣る、縛らせて遣る。」

餘りの事に泣喋舌りに喋舌つて、色按摩鼻血をだら／／。

「白痴め、汝の方が締られよう。」

仔細を聞いて、合壁は靜まつた。

「生意氣ツちやありやしない。」

對手を、蛆蟲と思ふほど、魔の御前の癇癪は、然うして後に尚ほ亢奮つた。のみならず、いきものゝ中にも、同じ人間の指を二本折挫いて盲の上の不具ものにした心は、靜に安らかではないらしい。あの、懷に手を挿され、咽喉に短刀を擬せられた時の花や

かな微笑は、蓋し、青く黒かるべき憤に、色を濃く染めたのであつた。

「見くびられた。」

蛆蟲に侮られたのは、鬼に虐げられたより、此の氣象の女に一層口惜い。和歌子は今に成つて、却つて、眦を上げつゝ、河童と　ーー　（此は花政の小僧が、勢よく奮んで飛込んだために木戸に忘れて入つた影法師のやうに、あの時一足をくれてちよろりと歸つた。）　ーー　與四郎とに、ものを食べさせながら、幾度も、乳房の上を、羽二重越に拂ふ眞似しては、是に肩を震はしては、指環を弄ぶやうに、右の二本の指を、熟と左の手に握りしめた。

「生意氣な、」

「鍋燒饂飩ーー」　と木戸に居る。

折からの按摩の笛は、久松市が指の痛さに泣號んで居るかに聞える。

和歌子は、ふと顔を上げて寂しく笑つた。河童と與四が其の鍋焼を打ち食ふ音は、、三人が喋舌るより賑かである。

「生意気ツちやあない。」

むゝ、生意氣といへば癇癪次手に、然うだ、裏の邸槇原の靈魂とか言ふ人形の事である。何白菊だ、霧之助だ。盲目の婦を忌嫌つて、邸へ惡兆を顯すと紋着袴の使者を寄越した、生意氣な。総領の娘でなければ、主人の子爵でも顔は見せぬ　・・・・・　生意氣な！　・・・・・　よし、おもしろい面を見よう。人形の首實檜に、丁ど可い。此方からも差遣はすべき誂への、上下つけた御上使一羽。

さあ途中まで差添への役目だが、首尾よく勤まるか何うかを與四郎に謀ると、小僧の返答が奇抜であつた。

「私あね、おまけに屋根屋の悴ですよ。」

直ぐに用意。で、小僧に木兎籠を持出させ、河童

に蝋燭を點させる。と點す河童の赤面も、捧げる小僧の黄色な額も、加ふるに、外套を被た木兎も、白衣姿の和歌子の前に、髣髴として前鬼後鬼、怪しき識神の立働く趣があつた。

木兎の目と魂をして鋭からしめ、耳を尖らせるためだと言つた。成程炯々として輝いて、頭が尖つた。

和歌子が電燈を消さしたから、ちよろ／＼と臘の火が此の怪しき空間を舐める。

「與四公、剃刀を出しておくれ、鏡臺の二つ目の抽斗よ。紅猪口があるだらう、次手に　ーー　」

「何をするんです、奥さん。」

叫んで與四郎が驚いた。其の紅猪口に指を入れて、そして剃刀の刃を當てたから。

「否ね、十日や二十日、こまぎれの牛肉ぐらゐ扶持をした御主人で、此の大役をさせるのは木兎氏に濟まないからね。一時に千石御加増。本當なら股の

肉を切って遣るのだけれど、別にひもじい思ひもさせない。それまでにも及ぶまいから、指の尖をへづゝて、些とばかし、私の血と身を食べさせて遣るのだよ。　ーー

「痛い　ーー　痛さうねえ　……　ほゝゝ、」

和歌子は擽ったさうに微笑んで、眉を顰め、

「卑怯なものだね、人間は　……　覺悟しても、思切って斬れないものだね。　……　與四公、一寸行っておくれな、お前。」

與四郎は疊を退った。

「串、串戯ぢやありませんや、　……　そんな、そんな無鐵砲な　ーー　お爺さんに叱られら、」

と言った、語の裡に、豫て、此の女の起居に、それとなく心着けよと吩咐けた、花政の情が籠る。

……

「何を云ふものかね、默ってりや知れやしない。

それも一寸だよ、指の尖をへづるくらゐ　……」

「奥さん、そして、何ですか、木兎が人間の肉を食ふ　……　食ふんですか。」

「食ひまするでございまさ。」

剃刀を見て、和歌子の指を殺ぐ、と云ふのを聞くと、何故か、いそ／／して、侏儒が、卓子臺の前面を、ひよこ／／と踊を踊る足つきで、疊半疊、行つたり來たり。で、一閑張の縁を手拍子で敲く。　……　其か、トコトントコトントコトンと、幽な狸囃子のやうに聞えた。　……　時に、しやがれ乾びた老人の聲で、然う言つたのである。

「もゝの身なら尚ほ甘露ぢやけれどもな、何處のでも可が、大好物ぢや。」

耳まで裂けて、爛れた口を、見るやうにした見えない目の瞼の、あたりが恍惚して、

「お河童」

「うゝッ。」

「では、お前に頼むわ。」

「うゝッ。」　一議に及ばず、白小袖の袖のわきから、あの、水掻の有りさうな手で、和歌子の眞白な手首を握ると、赤面を横に頬邊を甲につけた。

「あ。」

眉が顰むと、剃刀がカランと紅猪口のふちに鳴つて、和歌子の手に落ちた。侏儒は刃物に及ばず、黄色な向歯で食切つたのである。蝋燭の灯が空に靡いて、おなじ色が逆に下へ流れて滴る　・・・・・

「お退きよ。」

和歌子は、其の指から放さない血相の赫と變つて、赤いのに藍をさした凄い河童を、見えないながら突退けた。

「血も紅猪口に入つたの。」　、

「うゝッ、うゝッ。」

と言ふ。

「木兎どのに食べさしておくれ。」
「うゝッ。」
木兎の目が一雙、凸に光つて、侏儒の手に籠を出た時、さすがの小僧が、頭から半纏を引被つた。
血は、引散らした懐紙の幾重を染めた。
「食べるかい。」
「うゝッ。」
「食べて？」
「啖うた、啖うた、御馳走様にござりまあす。」
「お寄越し　・・・・・」
和歌子は木兎を抱いたのである。カチ／／嘴の鳴る音して、もく／／其の面と胸が膨れた、はたゝく翼は、蝋燭の火を煽つて魔風に伏せる。
「さあ、私の身代りに、お前、槇原の邸へ入つて、其の目で白菊の顔を見てお遣り、霧之助と云ふお小姓の家來が居るとさ、そんなものは構はない、白菊

だよ　ーー　與四公。」

「えゝ。」　と、きよろついた顔を出す。

「確乎おし、頼んだよ、さあ　……　」

奴は木兎を抱き取ると、魂が入つたやうに、ぶる／＼胴を震はせた。

「遣つけろい。」

「あゝ、下駄は要らない、何うせ脱ぐ。」

燭を取つて、鉢前の縁の雨戸に、すらりと立つ。小袖垣に散り際の山茶花と、裂け亂れた膚の衣と、灯影に封の薄紅。

庭は一面の霜を置いて、幽な月が針を散らす。和歌子は跣足で、與四郎に続いて、侏儒に袖を引かせながら下立つた。

豫て手筈は合せたり。隔ての杉垣を足がゝりに、すらりと上ると、大な樹の枇杷に潜つた與四郎の黒い影は、木兎を抱きながら、風の傳ふ如く、さら／

＼と鳴らす葉が、梢の中に傳はつて、枝はづれに、槇原の裏の物置の屋根に拔けた。唯、高波を虚空に連ねて離れて續く、母屋の棟。

唯、身構を直すと、其の棟がくれに、鍬形うつた片鎌の月が、きらりと、大庭の彼方の落葉松の葉隱れに成つて恰も消えた。

黒猫の如く、背を立てゝ振向いて、

「灯を、奥さん、暗くて見えない。」

密めた聲が、枇杷の梢を霜に響く。

和歌子は褄を高く取つた、膝の紅惜氣なく、脛を霜より白々＼と、杉垣に足を掛けた、が、目なし鳥。

侏儒を引寄せて、背中を、肩へ乘つてスツと立つ、

と雪なす衣紋が垣を越す、裳が落ちて、河童の皿の綿帽子。

「うゝッ。」

「靜に　ーー　」

十三

燈をかゝげつゝ、

「見える？」

「まだ。」

で、遠灯を届かすべく、燭を取つて、袖を背へ引くと大屋根の瓦が縦に一百枚、もとに映つた黒髪の偉な影が、林を倒すが如く枇杷の梢を壓して、女の顔が、衣紋を半ば、美しく凄き白蝋の面の如く垣根を越した。

「きやッ。」　とばかり、門番の爺やが此の姿に早腰を拔いたのである。

これより前、魔法の猿が槇原の屋根を這廻つて、破風の引窓を搜し當つるや、中へ木兎を放つと齊しく、ぬつと突立つたと思ふと、ちよろ／＼と甍の波を渡返して今度は荒い、ぐわさ／＼と、枇杷の樹をもとへ戻つた。

「遣つたよ。」

「まあ、嬉い、靜にして。」

ものの十四分經つたであらう。寐靜まつた槇原の御殿は、忽ち、戸障子が轟き渡つて、板戸襖の倒る、音、物凄く陰に響き、陽に鳴りはためくと聞くうちに、悲鳴を上ぐる女の聲、喚き叫ぶ男の聲。宏壯なる新屋形は眞夜中の都に唯一軒、七轉八倒するよ、と見る／＼、部屋々々口々から、溢れこぼれるやうに成つて、玄關へ、庭へ、臺所口へ、人礫で駆出し、飛出す。地震だ。火事だ。後で聞くと、火の玉が座敷々々を舞歩行くと見たのもあれば、緋の衣の山伏が大跨に寐床を踏越ゆると思つたもあり、中には奥殿の霧之助が突如として氣が違つて、大刀を拔いて切つて廻るとあやまつたのもある。範子と云ふ姫様は猿が寐床へ潜つたと見た。此の姫が、巴の如く立騒ぐ家族の中を、半ば夢心地に戸惑ひして、奥の室へ駈込む飯炊の女と摺違ひに、臺所口を遁出して、あれ／＼と聲を揚げた　ーー　時に、御殿の騒動に、目を覺いた門番の爺やが、用心棒と間違へて高箒を小脇に取つて出た處、姫の聲を聞いて驅付けたのが、垣根越の和歌子の姿に腰を拔いたものである。

實に、申譯の無いばかりだつたのは、御前様御二方、お上の御寢室。で、ものゝ音に揃つて立上ると、一大事に驅つけた家令が開けた襖を潛つて、ばさりと踊込んだ、木兎の舞あるく眞赤な外套。

「火かついた。　・・・・・　衣服にー・・」

と、仰せられると、奥方は裾をまくつた丈で濟んだが、あはれ殿様は丸裸、御家風とあつて鬱金色した越中褌。

姫の聲が人を呼んで、玄關番の書生をはじめ、家扶、家從、小間使も、物置前へ押合つて、枇杷の葉がくれの白衣を見た。

蝋燭をさし出し、

「垣根越にお見舞を申上げます。」

と、和歌子が澄まして言つたのである。

扨て、其の夜の中に、むづかしき顔の家從に書生が附添ひ、交番の警官か加はつて、いづれも色を變へて、表から露地を入つて威丈高に談じかゝると慇

懃に手を支いて、

「お恥かしい、雀盲の不束さに飼鳥を遁しまして

ーー」　と、しをらしく言つた。

其を又何うしよう。中にも握太な洋杖を持つた書生は、其の洋杖を尻尾の如く卷いて歸つた。

が、木兎である。魔の女の使者は、翌早朝、朝嵐颯として、社の大銀杏の葉の遠くから、はら／＼と舞込む中を、血だらけの死骸に成つて歸つた。

繩からげにして持込んだ、近藤友英の口上が恁うである。

「奥殿まで亂入したが、霧之助殿が、太刀でお仕官に相成つたぞよ。」

自分に取次いで、これを見た、和歌子の瞳は霜を拂つた。　ーー　散込む銀杏が黄楊の櫛、其の鬢を掠めて飛ぶ。

十四

「他人に話せば惚氣に成る、けれどもね、お前さんに言へば懺悔に成る　……」

「佛様あつかひですな。」

「可いぢやありませんか、其のかはりお肴がどつさりあるわ。」　と言ふ。

餘り澤山はない。一閃張の兀げた上には、例のハムサラダの大皿と、白丁の一升徳利、眞中に、銀杏の黄なる落葉を塗盆に褥の如く敷いた上に、木兎の死骸が血を黒く、外套を緋に、嘴を落し、翼を萎して横はる。

此の日、木兎のために追弔を兼ねた謝恩會を開くと云ふので、和歌子が自分に通りの花屋へ出向いて迎へて來た、床の間の上客は、小僧の與四郎。もう一人は、境木敏夫と云ふ、右の毛の長い美術生で、此は溜池邊の下宿に居るのを、自動電話で呼出した。

御馳走は他にある、うで玉子。　ー　小僧の分

は、鹿の子餅、饅頭。ーー　侏儒は一枚の肉と五個の玉子を頒たれると、其を持つて例の木戸際の物置へ引込んだ。恐れながら天にます基督が爾か爲さしめ給ふのであらう、此の河童は、敏夫の顔を見ると、夜中でも物置へ入つて出ないのが例であつた。

座に、お馴染の小掻卷、菊に水仙の友染と云ふのが無い。今日の入費に消えたのである。

和歌子は落葉を被つた木兎よりは薄寒さうな肩つきである。が、微笑の瞼はほんのりと、小春日の影を盆に注いで、

「お聞きなさい、　ーー　敏夫さん、　……此の木兎にはね、私の情人の血が通つて居るのよ。」

「驚いた。」

「おどろかなくつても可いことよ。情人の話をするんだから。それだから、他人に話せば惚氣に成る、敏さんに言へば、懺悔に成る。」

「そんな事は構はないがね、木兎の血とは何うし

てゞす。」

「あのね、此の木兎はね、與四公も、よく知つてるが、川越の町から秩父へ入る伊草村と云ふ所から出たものなんです　ーー　私がね、こんな身體に成らない以前だわ、お嬢さんで　……　尤も唯今でもお嬢さん、可ござんすか。」

と、華奢な手でよく持てる、一升徳利を片手つぎに硝子杯で受けて、

「名はお預りにしますがね、洋行歸りの醫學博士と、それはね、親たち、仲人、天下晴れた結婚をしたのよ。博士夫人十七さ。其の時は花櫛、花笄、氣取つたもんです。　……　博士はね、西の方の大學に勤めて居たんですが、三年目に久しぶりで東京へ來ました。一度故郷へ歸つて、次手に私も親類廻りをする事に成つて、行つた先が川越なの、川越の町に製絲場を營つたのが博士の實家よ。ですがね、うまれは伊草村なの、事業をするのに、農家が町へ出たものなの。　……

あの、山は秩父の山だけれど、伊草に白山の御宮がありますが、比〓神社、産神様だわね。生れた土地の鎮守だから其處へ參詣をする事に成りました。右の新夫人か御一所に高髷か何かで氣取つてさ、時節は可いわ、錦葉の頃。わりに暖い年でね、でも十一月末でした。

三里と云ふ、田舍道は長いのね。俥でがた／＼行く途中、弱つたのは、材木だの、瓦だの、炭俵ね、薪、いろんなもの、柿の籠なんかまで積んだ牛車が、幾臺も、幾臺も、二間三間づゝ間を置いちや、しツきりなし。大な牛の角なんか、乘つてる俥の泥除を越すの。中には濡れた鼻を仰向けて、ムモオなんて人の顏を覗いたり、白粉を塗つたやうに、額へ霜をかけたのもある、朝が早かつたわ　……　町を離れて、四五町行くと、もう牛車でね、狹い畝道を畝り／＼でせう。遠くの山の霧の中から、雲に乘つて湧いて來るやうに續いて、牛の數が果しがない。新夫人弱つちやつた。もう、泣きたく成つて　……

あら、可厭だ。もうと云つてさへ牛の聲で、爾時を思出す。

（歸りませうよ。）　（詰らん事を云ふな。）

と博士は遣合つた處が俥の上でせう。焦つたいから癇癪を起して飛下りると成れば、牛の背へ乘るんでせう。

可厭で／＼死んで了ひたいやうな氣のするのが、漸と蘇返る思に成る事がね、途次〳〵不思議にありました。往來が土手に成つて、づツと何處までも路なりに畝つたり、曲つたり、田の用水かと思ふ小さな流があるんですがね、其の小川の處々〳〵、水瀬の淀む木の下だの、石段の角だの、流れに堰のある處と云ふと、吃と水に浮かして、菊の花と水仙を置いてあるんです。菊は黄菊と白菊のみだれ咲、紅いのに、中には小菊、野菊もあつてさ。活けてあると云ふんぢやありません。流のなりに泛したんですから、活花を背戸へ棄てたんだらう、それにしても綺麗だ綺麗だとはじめ二三ケ所で、唯然う思つたばかりだつたんですがね、段々〳〵床しくなり可懷しくなりました。幾處と云ふ事なし。　……　大概、瀬の工合と土手の勾配で見當がついて、其處に、それ彼處にと、思ふ水には吃とある。一寸々々／＼、野社、堂も見たし、

塚、石地藏も路傍にあつたんですがね、其には一つも手向けてない。それとも土地の風俗で、何かの、あの、花の供養と云ふのか知ら。　ーー　車夫に聞いても知らないつて言ふの。何しろ、嬉しい、優しい、しをらしい。それに氣を取られて、片側ばかり見い／＼三里餘、牛車も、そんなに氣に成らなくなつたんです。

白山の御宮の森へ着くと、鳥居の前で、其の川は、路と擦れ／＼に淺く成る。土橋が架つて橋の袂に、また流に、水仙と菊か挿してあつたんですかね。

お聞きなさいよ。境内へ入つた手水鉢を見るとね、それには一輪冬牡丹。」

和歌子は弗と床の間の柱を見た。　ーー　いつぞやの、あの面影は早や消えた、其の花片に色の紛ふ酒に亂れた衣紋を合せて、

「森々とした暗い中に、燃えて、魂が、一ツ落ちてるやうで美しいが凄かつた。御宮は靜な、其は神

寂びた鎮守様でね。御堂の中に、雪のやうな神馬が一頭、其は可いけれども、屋根裏には白蛇の大いのが棲んで居るつて言ふんぢやないの。……私やなくツちや、女が入れはしないわね。

其時さ、奇代だつたのは、十五も二十も、大いんだの、小さいんだの、澤山繪馬が納つてゝね。皆それに、」

目を合せて、敏夫も疾や其の意を悟つて、齊しく銀杏の落葉を視た。

「どれにも木兎が描いてあるのよ。三體見まい聞くまいのやうなのもあるし、飛んでるのもあれば、留つたのも固よりだわね、皆、頬邊を恁うやつて、」

「お止し、お止し。」

「あら、與四公も遣つてるよ、頬邊を。」

「へゝへ。」

「御堂の中が、目に成つて、喙に成つて、翼に成

つて、何十羽だか皆活きてるやうぢやありませんか。晝も、朝のうちだつたから可いけれど、月夜でゞも御覽なさい、ばさり／＼飛出し兼ねない。　ーー森で眞個のが一こゑ號令を掛けたら、何うでせう、揃つて鳴くわ。中にも人を馬鹿にしたのは、繪馬が倒れかゝつて、白馬の鞍に乘つてる酒落た木兎ちやんがあるか、と思へば、落ちて仰向けに轉がつて居るのもあるの　……　うまいなあ／＼ツて、繪の好な博士が感心をして居たわ。何う云ふいわけなの此の所説は。博士も知らずさ　……　小兒の時分お宮で遊んだ博士は、此の繪馬を見なかつたつて、　ーー　自分の亭主を博士々々／＼　……　豪さうだけれど、今は他人だ、まけておけ。」　と冷酒を煽る。

「僕も飲め。」　と、敏夫が硝子杯を。

「杯を合はせませうよ。」

「何故？」

「博士の健康を祝して、」

「厭なこつた。」

「可愛いね。」

「澤山だ。」
「何うして、此のあとが肝心な木兎の話なのよ。」
「否、その、木兎が澤山らしい。」
「あら、罰當り。」
と目を涼しく、

「私を、いろに持つたのも、敏さん木兎か媒妁だわ、ほゝゝ、結ぶの神を失禮な。」
此の金と力の無い青年は、恁う言はれても仕方があるまい　ーー

今年秋のはじめ、學校なる教室の前の櫻の枝に、戸惑ひをして留つた木兎が一羽あつた。素早いのが、ひらりと窓を飛んで生捉ると、孔雀の標本をはたき出して其の籠に安置した。然らぬだに、もの凡て平かならずとして、筋骨金風に鳴渡り、不羈と自由を生命とする美術家が、我が佛得たりとなし、總勢二百有五名、立處に同盟の鯨波の聲を合せ、各自が、紙袋仕立の木兎の面を頭からすぽつと被つた、一列を長蛇に備へて、折から某展覽會開展の初日と云ふのに大公園を錬り廻つた　ーー

先陣が拂をかける。
ホツホー先のけろ、ホツホー先のけろ。
後陣が制止を放つ。
下アに、下アに　ーー　下アに、下アに　ーー
袋の中の聲を揃へて、
木兎殿の御通りだ、木兎殿の御通りだ。
（ホツホー先のけろ、ホツホー先のけろ。下アに下アに　ーー
下アに下アに　ーー
木兎殿のお通りだ、木兎殿のお通りだ。）
不思議な事には、山中の烏が眞黒に成つて雲を蔽うて啼噪いだ　ーー
其の時、籤に當つて、唯一人面を被らず、氣勢に逆立つ、長髪が頭が、木兎籠を頂いて、校中名代の背高が、列の眞中に、いとゞ爪立つて押したのが境木であつた。　ーー　此の役は樂でなかつた　ーー
かはりに、人動搖の中から一人、ふるひつきさう

な貴夫人姿の艶なのが、ツと、摺違ひ状に、衣兜へ紙片を挿んでかくれた。

和歌子が、それに、鉛筆ではしり書したのは、簡にして要領を得て居るから、其の全句を抜く、曰く

……

「ーーモデルに成つて上げませう、雇はれるんぢやないから、私の内へ入らつしやいな　ーー」

十五

「土橋を渡つて、羽織袴で二人連立つてね、鳥居前から、もう帽子を取つて、進んで階の下へ來て、一人が恭しく禮をすると、一人の老人の方はね、差した扇を膝に開いて、土下座をしたぢやないの。

博士と私が立つて居たから、急いで、神馬の前を傍へ退いて上げてね、あゝ、神様を拝むのに、此の位な心持でなくつては、と其のね、眞實なのが、何だか、私、身に染みて胸が切つた。

然うすると大變よ、二度目のおじぎは博士にしたのさ。まあ、何うしたら可いだらう、と思つた。

……（貴方様は××博士で入らつしやいませう……本日此の白山様へ御參詣のことは、町から傳へ承つて存じて居ります。ーー）

あの、村をすぐつても、途中まで出迎をしたかつたけれど、二人ぎりで産神様へ來たのに、却つて心を騒がせようから、それは控へた、と言ふ口上でね、

若い方が然う言ふの、少いたつ三十六七さ。老人の方は、其の父さんなのよ。でね、

（弟か）　（次男か）　と二人で云ひます。

東京の美術學校を半途でよした、弟が病氣をして居る。其の診察を頼みたい、　ーー　其の時、分つたわ。小川の小菊も、御手洗の牡丹も、私たちの來るのを知つて心ばかりもてなしに、背戸畠のを折つて挿した、が、それは親兄の手ではない。病人の弟が自分でして、と云ふ事よ。何うして、まあ、袴で醫師を迎へようツて人が然うやつて花を配つたらうと思ひましたがね、成程、分つた　……　唖なの。それも中年からなんだつてさ、其のために學校を引いた、と言ふの。

でね、可恐く頑固で、強情で、幾ら勸めても、自分では醫師に診て貰はうと言はないし、固より藥も飲まない。　……　然うかつて親兄の身にとつて、默つて打棄つても置けないし、二年と三年分別に盡きて居た。思懸けない片田舍へ博士のおいでは實に

神佛のお引合せであらうと思ふ、何うか手前どもへお立寄下すつて、診て遣つて頂きたいと、そりやもう氣の毒なほど、手を突いて頼んだよ。

一も二もありやしない。すぐに行つて上げるだらうと思ふと、博士がね、斷りました。」

「斷りましたか。」

聞いて居た敏夫も案外な樣子である。

「えゝ、斷りましたよ。（私は内科だから分りません。）捻つたわね、先生、實際咽喉科ぢやないんですからね　ーー　否、決て惡くは言はないい、ーー　博士の責任を大事に思へば、其方が當然……　又、實際年は若いけれども、眞面目な學者なんですからね、對手がお百姓だからなんぞ、と思つたんぢやありません。それは私にも分つたけれど、此處は奥さんの役でせう　……　人情に搦んでね、分らないまでも診てさへあげれば、醫師が嫌ひな病人　ーー　それも嬰兒と思へば憎くなし　ーー　親御、御兄弟の氣安めだけにも是非貴郎。　……　で以て、新夫人、艶のいゝ圓髷の意氣好みで生

意氣な、藤色鹿の子か何か横にして見せたから、博士が默つて頷いたわ　ーー　牝鷄の鬨とか何とかさ、忘れたけれど　……　旦那が板倉内膳正でない限りは、一寸女の差出て然るべき所だわね、ほゝゝ、何か然るべきだらう。」

笑つて息續ぎを引掛けて、

「二ツツ、おたしなみのお職掌道具を入れた革鞄があります。車夫が持たうと云ふのを、故と奥さんが御手づから。少々煩かしく言へばね、大學の分科の專門をして、一寸　……　神聖ならしめようとすると來たものよ　ーー　まあ、お聞きなさい　ーー

博士の自信をまげさしたから、心持を惡くさせまいと精々御機嫌を取る氣か何かで　ーー　大きに家庭劇を發揮したの。

屋根は見えて居ました。車にも及びません　ーー

路は別で、あの小川の流には分れたので、水はあつても、それから前に、小菊と水仙は流しては無いのだけれど、舊來た水の影のやうに、づツと行末の雲にまで色が映るやうな氣がしたわ、空が澄透つて、

秩父の山々、武甲山、笠山が、ぽつと紫に霞んでね。

が構内へ入ると、下男、下女、大勢ばら／＼出迎へたのよ、大百姓と見えるわね。一度御休息と云つたけれど、博士は急ぐから早く診ませう、其の方が勝手だつて、すぐに病室　……　ぢやない、張出しだと言つたわ。其の弟と云ふ男の居る處を　……　其處へ引籠つてる、めつたに母屋へも出ないんだとさ　ーー　唖で、片意地の、旋毛が曲つて、陰氣に引込んでばかり居るのだらうと思つたの。

ーー　さあ驚いたわ、大變だツちやない　ーー

唖の片意地の旋曲りでご御勘辨が願へますかツて。

……　あの水に、花の道しるべが無かつたら、可加減お轉婆な私だけれど遁出して了ふ處だつた。

何うしたツて處ですかよ、　ーー　敏夫さん　ーー

ね、成程張出しだわね、疊百疊敷ぐらゐ、床も板張りで、四方を圍つた、がらんとした、然うね、何の事はない、椅子卓子を取拂つた學校の教場を云つ

たものなの、四方三方、木兎の繪で充滿。」

境木も、與四郎も眼を〓つた。

「木兎の天、木兎の地、木兎の城だわね、　　・・・・

・　繪馬も分りました。」

と言ふ時、和歌子の瞳は、秩父の山を見たと云ふ、透明、玲瓏とした其の空の思はるゝよりも尚ほ澄透つた。

「繪が拔出したのかと思ふ、ばさり／＼飛んで歩行いて居るのがある、どれが眞個ものだか分らない。中にはね、描損つたと見えて、折つたり、摧いたり、引裂いたりした、大な目一ツ耳の尖つた頭の缺片、片翼、床にちり／＼に成つて、こんなのに影が湧いて、却つてむく／＼動きさうでね。おまけに樹林の中でせう。天井硝子張の明取から、枯葉の樹の枝の映るのが網のやうに擴がつてゝ、何だか、魔に攫はれて樹の上を傳はるやうで、足もわな／＼する。

向うに、一段高く築いた、お湯屋の番臺見たいな床を組んで、薄汚れた服裝して髪を眞直に逆立てゝ、度の強い近眼鏡を光らして、繪筆を引掴んだまんま、客と見て眞四角に坐直つたのが、肩を怒らした脊が高いから、宛然、ぬくり突立上つた形なのよ、御次男です　ーー　敏さん。」

「……」

「貴方と學校は違ふけれど、矢張り美術の生徒だつたの、一寸御紹介申しませう。」

と、貧乏徳利でがふ／＼と酌をして、

「吉岡展　ーー　展は展覽會の展の字よ。」

「僕は落第だ。」

と、ぐい、と硝子杯を引いたので、注ぎかけて居たのが溢れて、淋漓として滴つた。

和歌子は澄まして徳利を控へて、

「あんな處へ及第をしたがるのは女房の欲い人さ……　其のかはり情婦は出來ない。」

と片手を頬杖して顔を見る。

「飲め！」　と、半ば苦つて、半ば笑つた。そして手巾で膝を拭いた。

「親御と兄さんが、默つて唯叩頭をするのよ。博士が爾時ね、可恐がる私の手を取つて、つか／＼と出た。　ーー　木兎の憑ものがした唖の狂人、いきなり兩袖を羽打つて天井へ舞上りでもしようかと思つたら、立派に丁と謹んで挨拶をしました。筆を劍のやうに片膝に突立てゝね。

おとなしく診察をして貰ふのよ。　……　明窓をあけさせて、丁寧に身體を觀て、更めて、それから瞬もしないで咽喉を診ました。

「治る、今直ぐに治してあげます。私の言ふ通りになさい　……　然う云つた。」

ーー　（博士の態度は肅然たるものであつた、）

ーー

「少し身體をあとへ引いてね、博士がね　（　ーー

私の聲にお續きなさい。）　……　と云ふ。

唖は頷いたんです。

「い」　と博士か呼ぶ。默つて居る。「ろ」

博士が叫ぶ。默つて居る。「は」　博士が云ふ、

默つて居る。　……」

與四郎は聞きつゝ、ごく／＼と咽喉で云つた。

「いろはにほへとちりぬるを、一つづゝ言つても

聲の出なかつた其の唖がね、「わアかア」）　と

博士が言つたと思ふと　……「わーかー」

……　唖の咽喉から聲が出ました私は博士を神だ

と思つた。拜みたく成つたんです。

も一度、博士が、「わーかー」

「わーかー」　と唖が言つたと思ふと、

「和歌子さん。」

其の聲で唖が呼んだの。木兎がものを言ふと思つ

た　ーー　私は思はず、ぶる／＼震へた。

「（和歌子さん、　ーー　貴女は私を御存じある

まい。私はよく知つて居ります　……　私は戀をして居ました。御結婚が終つたと知つて、噫萬事休す、男子世に生れて、口に戀人の名を呼べないくらゐなら、一生、末世、金輪際、聲を出す事は斷じて要らん！　ーー　其時から夢にも口を利かんのです。不思議な運命は死に先だつて御主人の前に貴女の名を呼ばせました。）」

ーー　博士に　ーー

「（御診療を謝します　……　が、貴下は敵だ、道を清めて心ばかり花を捧げたのは、貴下を迎へたのでない、奥さん　ーー　和歌子さん、もう一度貴女の名を呼ばして下さい　……　和歌子さん。）」

「（はい、）　とつい知らず、返事をすると、颯と色を變へたと思ふと、眼を塞いだ、あれ、血が唇を。舌を噛んだ。忘れもしない、凪が颯と卷落すと吹込む銀杏の葉と一所に、繪が飛んだのが、窓を舞下つたのか、大な木兎。」

和歌子は、思はず、盆の銀杏の葉を取つて、唇に

當てゝ、犇と噛む、と皓齒が鐵漿を染めたやうに見えて、其が不思議に初々しく、瞳は凉しく、頸は清らかに、心の影の塵も留めず、通ふ血汐は霞を描いて、同じ女にも又較ぶべきなき美しさであつた。

「ねえ、苦しさに、仰向けに血を噴いたのが、飛下つた木兎に颯とかゝつた時、私は身體を投つけて　ーー　あゝ、死んぢや、不可い、冷くつて。」

其の盆の木兎の嘴に　ーー　涙の顔を振仰向く、と婀娜な微笑。

「與四公。嘴を。」

突如小僧を横抱きに抱轉がす、石頭の大な木兎、重量、十四貫三百匁。

十六

「失敬しよう。」
「おや、振るかい。」
「勿論です。」
「何故さ。」
「それまで聞かせられて、これまで見せられりや澤山だ。苟も僕は男だ。いつかの行列の事を思へば、そんなんだと、僕は、木兎に頭を蹴つけられたと同じ事だ、馬、馬鹿にしやがる。」

「ふゝん。」　と笑つて、
「妬くね、此の人は。おや可笑い。　ー　男の嫉妬を妬くのは、婦の不品行よりか世の中のすたりものだよ　……　見つともないわね。」
「何うせ見つともよくはないんだ。」

「勿論、見つともよくありませんとも、髪は長いし、頤は長いし、日は短し、靴足袋は破れてるし、ね、　ー　然うさ、また、あの木兎を擔いだればこそ不思議に色が一ツ出來たんだわ。色と言ふもの

は亭主ぢやないんだよ、可かい。でも、お前さんは可愛いことを云つて。（自分は半分苦學をするので、腕はなし、働きはなし、何の手助も出來ないから、こんな事は言はれた義理ぢやない。が、心の中を察してくれたら　……　そりや他に、人も、男もあらうけれども、せめて、自分の、目に見える處へだけは、誰も寄せないでくれろ。）　ーー　と言つたね。　……　言ふことが氣に入つて、しをらしいから、爲なくも可い我慢をして、御覽な、まあ、此の頃の、内の體裁を　ーー　お姫様が其の日ぐらしさ。恩には被せない、私が勝手　ーー　道樂だから。串戲にも妬けた義理ぢやないぢやないか。けれども理屈は言やしない、憎くはないから。だけども男の嫉妬は見つともないからお止しなさいなね。」

「濟まない、が、餘りだ。私は妬きません、妬きませんが、歸ります。歸つて、木兎の繪を描くんだ。」

「あゝ、結構。　……　御自分のためにも、親御、御兄弟、世の中のためにもお歸んなさる方が結構です。　……　ですが、いろの爲には何にもな

らないから。　……　然う思つていらつしやい。そんな掛引はね。」

「進退！　進退とは何だ。」

「ぢや、眞個にお歸んなさい。が、一寸お待なさいよ。」

卷莨を吸着けて、

「さあ、」

と、くの字で持つて出す　……　吸口を男の唇。

「いや、兎に角歸るから。」

和歌子は艶に莞爾して、

「ほゝゝ、だから、露地を吸つてお出掛けなさいな。誰も留めはしないから。」

いや、然う言はれると、まさか、一本貰つて出られもせず、其處で敏夫は押立尻をして、

「飲んで行く　……」　とばかり、冷酒の硝子杯の殘餘と煙草をちやんぽん。吸つちや飲み吸つちや飲む。　ーー　與四郎が居たらば其も出來まい、石頭の大木兎は、今の一件に羽を生して、露地を横

飛びに飛んだと知るべし。　ーー

「あとは獨言よ、聞かうとも　聞くまいとも、煙草の間　……」　和歌子は投げた手を額に當てた。

「あゝ　ーー　博士が些と妬いたわね。　ーー私は其の時、舌を食切つた唖を抱いたと思ふと、後を知らない。母屋の座敷で氣が着いて、泣く人やら、鬱ぐ人、考へる人、俯向く人、默つた人に送られて、博士も矢張默然で、白山樣の前まで歸つた時、然うだ、ふつと氣がついて、

「あゝ、牡丹を持つて來よう。」　ーー　手水鉢に　ーー　木兎の畫を描く男の、鬼火が光るんでするもの。

「止せ、そんなもの。」）

「否、止さない。」

博士の留めたのが口惜いから、駆出して、羽織の袖に抱いて歸ると、可厭な顔をして睨んだから、もう一度拗ねた。　ーー　「私は人間の道を歸るのは

可厭です　……　牛車が可恐いから。　……」

其の時は、一臺の影も見えないのに　ーー　「否、往つたものは吃と歸る　……　途中で逢着すに違ひないの。」　然う云つたのよ。博士がね、

「何處を歩行く。」

「此處を歩行くわ。」

でね、駒下駄を脱ぐと足袋跣足で、石垣から、褄も取らないで小川へ入つた。早い處が瀧を上るやうな勢で澄まして捗ると、博士の俥が矢のやうに飛んだんです。それを見ながら、水が深く成つて倒れました。

一晩、伊草村の御厄介。あくる日、歸らないと云ふのを歸さうとするし、送らうと云ふ展さんの葬式を送らせないから、途中まで、棺桶と並んで出た、私は駕籠で。大勢に取巻かれて、路を分れて川越へ歸つたんです　ーー

御離縁申すまでもござんせん。自分の家からも御勘當、と云ふのがね、義理ある兄の　代に成つて居ましたから、義絶と言ふの。

些と擽つたいでせうけれど、一寸、惚れなほしては不可い事よ、此でも伯爵の御落胤なの。」

と云つた　ーー　不思議に此の女、品が備はる。

「母さんは新橋の藝妓でね、止せば可いのに、若いから何にも知らずに、其の伯爵の世話に成つて、私が出來たとお思ひなさい。まだお腹に居た時よ。

ーー　ぽツと成りかなんかで、もう四月とか何とか殿様に聞えあげる、と何うです　・・・・　伯爵が後とも言はず、其の晩、内證で待合の女房を呼んで、

（彼女には内々で、客帳を開けて見せろ。）　と言つたつさ、宿つた月日を當らうと云ふんだわ。外の客と引較べて、伯爵様お手づから御帳合。赤子の出入帳は地獄にも沙汰を聞かない。女將も江戸兒だから癪に障らして、密と筒抜けにしたんでせう。母さんが、蒼く成つて、其つ切。　ーー　私を産んでからも世話に成らずに、意地を立通したけれど、苦

勞をしぬいたもんだから、二十七の若死に、臨終に氣が折れて、九歳に成る時、お邸の言條通り私を引取らせたツて次第なんですからね。急拵への御姫様、面倒くさい　ーー　母さんが中程住替へた柳橋に居た時が忘れられないで、幾度駈出さうとしたか知れないの、窮屈でね。何うせ、待合の帳面に紅で印のついたお姫様なんだもの。

ーー　露西亞は、のん氣だつた、生命は危かつたけれどもさ　ーー

でもね、はじめ滿州へ行くのに、博多から汽船へ通ふ端艇が出ると、麗な小春日に、光る魚が晃々舷を泳いだの。私、欲くつて成らないんでせう。

「（タビ）　さへありや。」　然う言つた人がある。

（二つあるから、澤山とつて。）　と私、兩方の足袋を脱いで笑はれたわ。後で分ると對州の人だつたの、對馬ぢや　（タモ）　の事を　（タビ）　と言ふらしいわね。　……

一寸、お姫様でせう。たゞし足袋だけに下つてゐる。」

「和歌子さん。」
「はあ　……　おや、更つて。」
「私は、貴女にや、まるで、今の其のタビですなあ。」
「酷く御感心遊ばしましたね。」
「考へなきやあ成らないんだ。」

「惚れてると云ふのでせう、そんな、煩かしい、謎見たいなことを言はないで、足駄穿いて首つたけと云ふものよ。」
「否、酒落ぢやない。」

「眞面目だね。酒がさめて　……　あゝ、薄ら寒い、敏さん、暖まらうか。」
「いや、歸ります。歸つて木兎の繪を描きます。」
「然う、更めて、身の上話に、同情とかツてのをしてさ、奮發して、私を何うにかして下らうと云ふのならお止しなさいよ。何うせ初から貴方は玩弄なんですもの。怒つちや不可い、珊瑚も金剛石も、言つて見れば玩弄品だもの。木兎籠を被つたつて、それが、私に　……　立派な彫刻か、繪に見えれば、

貴方は貴いものだわ。それとも、口惜しかつたり、妬けたりするのならお止しなさい。私にや、意地を張ると後悔するから。」

「何を後悔。」

「未練が出て、暗夜に此の邊をうろついて、私が、あの、白い寝巻で、裙と手に紅い火のちらつく處を、見ようものなら、……後悔するから……さ。」

敏は、蒼く成つて、其の將に然るべきを豫期しつゝ、然も如何ともする能はざる苦悶の色を漲らしたが、さすがは男だ、衝と立つた。

「失敬。」

「ぢやあ、然やうなら。思はせぶりに送りませう、兩花道の出と云ふ處……」

で、格子を出る男の、あとから、縁を下りて木戸へ出た。其の時、何故か、床にあつた、あの楊弓を

手に取つた。

庭の木戸へ、此の姿が片扉で立つた時　ーー

（花政の一捻りに今は鋒先を納めたが、店だてを強請して斜めにはつた）　ーー　貸家札も、かしくと讀める風情あり。

白衣に灯す、蝋燭の、白脛ちらめく緋く縮緬、白晝ながら俤立つて、敏の足が羽目について淀んだ時、恰も町通りを縦に打つて通る××師團の騎兵少尉の、立派に盛装したのがあつた。駒は山の如く露地を壓した。的は大い、射ごろは可。

和歌子が輕く曳いて弗つと切る、と白羽が發と馬を射た。唯棹立ちに成つて、嘶く聲より、拍車の音が鳴響いて、見事に乗鎭めて、飜然と下りた。咄嗟に、革手綱を高く取つて、露地を見込んだ、風采を見よ。

「誰だ。」

「何をする。」

敏が、思はず我事のやうに言つた。

楊弓を小脇にして、

「羊のかはりに、七面鳥を食べるの　……　クリスマスが、近いから。」

翌日は、早や花政の店の中へ、劍を鳴らして其の少尉が直立つた。嬉しさうに花を見なから、

「牡丹を　ーー」

十七

「お河童。」

「うゝ、うゝ。」

「眞暗な路だね。」

「うゝ。」

「お前は私を引張つて、どんな處へ、何處へ連て行くの。手水鉢に牡丹の花の活つてる處かい。」

「うゝッ、うゝッ。」

「ぢやないの、然うね、何うせ、そんな心意氣は知らないから。屹と何だらう、昔噺のやうに、寶の瓶の埋つてる處だらう。」

「うゝ。」

「おや、嬉しいね。」

と微笑んだが、雀盲の瞼は寂しかつた。……

和歌子は　ーー　（其れより後、幾度も幾度も、其の白衣に灯した姿を縁に露はして、暗路をあこがるゝ敏夫を知りつゝ、堅く、木戸を鎖し鎖しするうちに、彼が發狂して自殺した事を聞いて。）　ーー

したゝかに酒を煽つた醉心地を、頻に侏儒に袖を

取つて曳かれて、庭の木戸から、物置の前を、半ば夢心地で町へ出た事を覺えて居る　……

が、方角も何も分らぬ。唯侏儒の導くまゝに袖をまかせて行くのである。現ながら、此の怪面異體のものゝ、我が身を載せて赴く前途には、いづれ奇蹟があらうと思つた。あはれむべきは、そして其の期する處は、牡丹の花の一本より、戯に言つた寶の瓶より、實は一條の光であつた　ー　恁くまでの婦にも　ー　恰も其の病にかゝつた棄身の出來心で、ふと曼珠沙華を折つた雜司ケ谷の途中から連戻つた畸形兒であつたから。　ー

ー　袖を任せて行くのである。唯、霜のしん／＼と降りる夜の、風も無いのに、前途が颯々と裳を切る。

「頓馬が、一緒なの。」

大な犬が、ひた／＼と裾に摺れつゝ通るやうである。

「うゝ、うゝ。」

「どつちだか分らない、お前が乗つてるのぢやないか。私が乗つてるのか知ら　……」

また、もの音に打傾いて、

「牛が曳く車が通りはしないの　……　汽車かね、水の音なの。」

「いんま、川を一ツ渡つたぢや。」

「あら、私は空を飛んでるの。」

と思ふと、身體が浮かないで、足が雲ならぬ地を踏みつけた。然も段々に低く降りる。泥の香、樹の匂が芬とした。

餘りに足が低く下りた。

和歌子は、爪立つて褄を留めた。

「お河童」

「うゝ。」

「何處だか、教へておくれ。　……　口惜しいが、見えないから。」

「うゝツ、見えませぬか。」
「察しておくれ、だらしは無いよ。」
と、俯向いて白い手で探ぐる、とにちやりと滑らかして、侏儒が其の手を取る。
「もう、やがて見えるぞよ。」
和歌子は振拂ひもしないで、
「あゝ。」
「それ、星が見える。」
はツと思ふと、晃々と霜夜に冴えた星の數。が、其の星は、高く蜘蛛の巣の如き樹の（枝と思ふのが、）土を抽いたあらはな根に散る……横穴を穿つた深き地の底に居たのである。
「彼に燈がある哩。」
大なる樹の切株を卓子の如く一段高く据ゑたのに、かんてらめいた燈火が點れて、正面の土饅頭を、椅子にして、ぬい、と、向う面に腰を掛けたものを何

とか見る、小牛の如き黒犬である、トオマスの頓馬である。這奴、のつぽ面の垂耳の頭に、紅い土耳古形の帽子を戴き、空嘯きつゝ、チン／＼の手が、此方を大風に麾いて、

「わあ、わあ、いのあ、わあ。」

和歌子は夢だと思つた。思ひながら、然も氣丈であつた。侏儒の且つ引くまゝに、つか／＼と燈の前に進むと、

「ごろ、ごろ、ごろ、にい。」　と鳴いて、椅子の横に腰を掛けた、古猫が一疋居る　……　見覺えがある、あの、錦木の宿のあたりを押歩行いて、屋根中を汚す風來の、男猫で、（ーー　官吏の家に飼つた、駒と云ふに優げな雌猫を狙つて、嫌はれ通しの腹癒に、其が産んだ小猫とともに、對手の猫を食殺した、　ーー）　顱破れの三毛が、釜底帽子の青いのを被つて、爛々たる眼を光らし、和歌子を睨迎へて呻ると齊しく、鋭き爪で、顋の髯を掻捻つて、片手で卓子の上に置いた一冊の帳簿を示した。

和歌子は尚ほ信じた。恁る思ひに因つて雀盲が癒えるのであらう　ーー　指さゝるゝまゝに其の帳の面を見た。「……」「……」

「……」　花政の娘お光の名、眞先に記したり、嫁のお久、官吏の令孃、銀行員の若い妻、和歌子が名を知つた居まはりの女らしい女は、一人もつけ落がない。槇原範子　ーー　子爵の令孃である。其の小間使が三人。湯屋の女房、花政の表町に錢湯があつて、女房が美婦なので、其もあつた。　ーー

湯屋の女房。

名の上に、赤と、黒、汚れた黄で、不思議な、意味を爲さない點を幾つも打つてある。讀んで和歌子が、自分の姓の錦木に瞳を据ゑた時、トコトン、トコトン、トコトン、と此奴は侏儒だから土饅頭の椅子へ、ひよい、と立つて、切株のまはりを敲いて、頸に卷いた、黄色な手巾をひらめかしつゝ刎ねて居たのが、赤爛の手の、蚯蚓の如き指で、和歌子の名に指して、

「うゝ、今夜は、汝の番と思へ。」

「あれ。」

和歌子は、うまれて以來、嘗て知らない悲鳴を上げて土に躓き、よろめきながら、穴藏の段に飛つくと、上から、眞黒な面で、倒に覗いた、大牛が一頭、モウ、　……　ドン、と寢て、腹を以て蓋に蔽ふ。

「母さん、母さん。」

思はず、亡き母に救を呼んで、中空に縋る手は、左右に取つて開かれて、打込んだ杭に、其の兩の脛も縛められた。

「堪忍しておくれ、堪忍して　ーー」

「おのれ覺えとるか。」　と云ふ／＼、穴には彼等三頭ではない、鼬も鼠もどろ／＼と滿充ちた片隅から、這出したのは按摩の色男久松市である。

「忘れまい、忘れまい。」

いつか、挫ぎ折つた二本の指で、女の兩の頬を交る／＼、ふた／＼、と嘲笑つて引彈かれた時は、其の冷さ、其の不氣味さ、其の可忌さが骨髓に通つて、

亂れた黒髪が皆動いた。

懷に手を掛けようとすると、侏儒か横合から躍上つて、按摩の顋を蹴落した。

「退れ、下郎、汝には食のこしを授けるのぢや。」

和歌子は帶を奪はれながら、伊草なる吉岡展の最期を思つた。彼は葬られたのである。我が亡骸の、あとの屈辱と汚辱を察すれば、舌を噛む事さへ出來ぬ。瞳は破れて曼珠沙華の幻の如く颯と血汐が眦を走つた。

時である。穴の上に、雷の如き音がした。づゝん、と大牛の轉んだ響。唯見ると、穴を飛下り状の、萌黄の袴、黒小袖、手に三日月の輝くは、晃乎と振閃めかした小太刀である。

が、忽ち眩んだ、和歌子の目には見えずして、

「うゝッ。」

眞先の、號苦の聲は侏儒。續いて、叫ぶ聲、呻吟

く聲。駈廻る音、倒るゝ響。

「や、や。」　爽に清い矢聲の下に、颯々と鳴るは太刀風である。

犬が潜んで來て、牙が、和歌子の身に觸れた。

「あツ。」

「畜生！　推參な。」

ハツと唯一打、後は死の如き、墓の如き、寂寞であつた。

抱起されて、縋つた時、和歌子は見えない目に、男の髪の美しさ、と袖の薫を知つた。

手を取られて、萎々〳〵と成つて、肩と思ふに顔を伏せつゝ、嬉しさにすゝり泣いた。

「此處まで。　・・・・・　最う可い。」

と、手を放すと、力なく▬と成りつゝ、袖に縋つて、

「誰方、誰方。」

「御隣家(ごりんか)の……霧之助(きりのすけ)。」

十八

和歌子は三の橋邊の何とか云ふ巨刹の鐘撞堂と、一株の大槐との間に、死んだものゝやうに成つて倒れて居たのを、寺男に呼活されて、そして其の介抱で家に歸つた。歸るにも歩行けなかつた、左の太脛に鎌に掛けられた如き痕がある。

境の自殺したのを聞いた晩、三升有餘　ーー　ウオツカ仕入れの酒量は強い　ーー　酒を煽つて、ぶら／＼と、家を出て、何處を歩行いたのか知らず、倒れて怪我をしたのであらう。　……　そして地底は夢だと言ふ。が、不思議な事には、其ツ切、侏儒の行方が知れない。それから、頓馬は事實狂犬として警察に引上げられた。

どツと寢た、和歌子は起てなかつた。が、雀盲は癒えた。　……　花政の隱居が、財布を頚へ掛けて出張つて、醫師よ、藥よ、と手當をしたのである。

「霧之助様、霧之助様。」

熱に浮かされて、もの狂はしく呼續ける。

やゝ、人心地が着いてから、花政が仔細を聞くと　生命に掛けても、槇原の人形が見たい、と言ふ。和歌子は、はじめて戀を知つた。

世故を經た爺様が、よく情愛を知つて、大く頷いて、死んだ姉娘に婿を取るのだと騒いで、其の人形を、と種々手を廻した。越中屋長助にも下ぐべからざるに頭を撫でゝ見たが、これは出來さうな事ではない。

「霧之助様、霧之助様。」

正氣に成つても、譫言に言續けた。

「お爺さん、大變だ。」

一夜、與四郎が目の色を變へて飛んで歸つた。

「和歌子さんが、白裝束で、杖に縋つて、槇原の邸へ行つて、皆に酷いめに逢つて居ます。……」

爾時、爺さん、節季近の忙いのに、花鋏を投出して、

「さあ、野郎ども、霞町は火事だと思へ、續いて來い。花屋政右衞門、娘の追善に暴れるんだ。」

と、手鍵を杖に、ひよこ／＼して、

「與四公、こんな時の用に立つ、自轉車で合乘しろい！　……」

爺様が駈着けた時、和歌子を、古井戸の板に眞傾向に倒してあつた。

あの、奥方は、枇杷の根に床几に掛つて、家扶、家從、執事などが取卷いて、書生と車夫が釣瓶を倒にして、和歌子に水を浴びせて居た處である。

花政が手鍵を握つた。

「俺の娘だ、此奴等。」

誰の娘でも構はぬ。……見せる事の成らないと云ふ當御殿の霧之助殿を斷つて拝みたいと申す。御前は旅行中。奥方、應接間でお逢ひなされて、此の上は、當方の思ふ存分に成るか。汚らはしい身體

を清めるが可いか、と訊く、と望む處だと、云いふから、恁く計ふのである　ーー　念のため當人に聞けとの事である。

和歌子が突伏せられ、おしひらめられながら、蒼白い顔に莞爾して、

「お爺さん堪忍して、思ふやうにさして下さい。」

奥方がしたり顔して、

「それ、背中ばかりでは不可ません。腹の方もお洗ひ。」

「えゝ、衣服は汚え。」

と書生が黒髪を掻掴んで提げるやうに引起したので、痛みに雪の足をかゞめた、宙に釣られたやうである。

「何でもない、霧之助様に逢ふのには　……」

花政の以前に、既に少尉が居て、渠さへ如何とも、詮術を知らないのであつた。

其のまゝ、仰向けにまた引倒して、雪にもみぢを散らすが如く、井戸の水を浴びせたのである。

みどりのしたゝる黒髪は、ぬれ絡はつて、脛もあらはな、裳の其より長かつた。

「何うぞ、霧之助様に　……」

「いゝえ、まだ此の上に、家風に從はねば不可ません。子爵家は倹約を主とします。誰か、糠味噌を掬つて來て、此の女に食べさせなさい。入ものは、犬のが宜い。」

花政は總入歯を噛砕いた。が、少尉があつて劍を拔かぬものを如何する。

「此も家風です。」

鮑貝に糠味噌を、車夫の手から、頰のあたりへ突着けられて、和歌子が、熟と見る頰を、足を擧げて、足袋の尖で、子爵夫人が、ぐい、と擡げた。

花政が少尉の手を抑へて居た。

「いろと世帯を持つのには、お香物が大事ですとさ、あゝ、おいしい！」
子爵夫人が、塵を排つた。
「明日來なさい。」
屹と和歌子が顔を上げて、
「それも御家風かえ。」
「家風です。」
「何と、」
と、すつくり立上つた。が、病後のつかれと、足の痛みに、よろめいて倒れた時である。
「此處だ、旦那、お抜きなせえ。」
「可。」
長劍の鞘を拂つて、きらりと翳した、師團屈指の腕白大將。
「松平龍介、さあ、撫切だぞ。」
土足で御殿へ踏込んで、霧之助を抱いて、奪つて出た。自分の女の戀人を、男の意氣は潔や。

其の黒小袖の前髪を、胸にひしと緊めた時、あはれ見よ、人々よ、和歌子の姿、膚も、衣も、たゞ寒月の光であつた。

玉の指が觸ると鞘走る、黄金づくりの太刀を逆手に、氷の中なる火の如く、乳を薄紅に波打つて、戀に燃えつゝ牡丹の花片散るが如き其の心臓の只中を。

【完】